

## 吾家の富

(一)

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か云ふ、狭くして且陋なりと。  
 家陋なりと雖ども、膝を容る可く、庭狭きも碧空仰ぐ可く、歩して  
 永遠を思ふに足る。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り見舞ひ、風、雨、雪、霰か  
 はるく、到りて興淺からず。蝶兒來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥  
 來り遊び、秋蛩また吟ず、靜かに觀すれば、宇宙の富は殆んど三坪

の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

(二)

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に  
 満つ。風ある日には、青々と霞める空より白き花ちらちらと舞ひて、  
 一庭須臾に雪を散らす。

隣家に花樹多し。風に從ひて、飛花吾庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛  
 々、見るが内に滿庭花の衣を着く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻  
 あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

(三)

庭隅にはのすみに一株いちゆの山榭くちなしあり。五月さつき間、鬱陶うつたうしき頃ころ、香かしき白花はくくわを開ひらく。  
 主あるじも妻つまも無口むくちなれば、此花このはなの吾家わがいえに開ひらくは宜うなりけり。  
 老李らうりの背後うしろに一株いちゆの碧梧へきごあり。碧幹亭へきかんでい々として些ちとの邪よこしまなく、吾如わがごと  
 く直なかれと教おしふるに似にたり。梧葉ごたうと、手水鉢てみづばちの側そばなる金剛纂きんがうさんは、葉廣はひろ  
 うして、吾家わがいえの雨聲うせいを多おほからしむ。  
 李すもへじく熟じやくして白粉しろこふきたる琥珀玉こはくぎやくの滾々ころころと地ちに落おつ頃は、與あたへて喜よろこぶ男おとこ  
 の子こ一人ひとり欲ほしと思おもふ心こころも起おこりぬ。

(四)

つくつくはうしの聲こゑに、世よは何時いつか秋あきに入りて、山茶花さざんか咲さき、三尺じやく  
 ばかりの楓かへでも紅くれなひに燃もえ出いで、唯一ただ一株いちゆ前まへの家主あそじの植うゑる殘のこしたる黄菊ききく  
 も咲さき出いづ。名苑めいえんの花美はなうつくしと云いふとも、秋あきのあはれ閑寂かんじやくの趣おもむきは却かへ  
 つて吾庭わがにわの一枝しにある可べし。蛻巖せいがんの翁おきななりせば、「獨ひとり憐あはれむさひ細菊さいきく近荆きんけい  
 扉かき」とや吟ぎんせむ。耻はづらくは「海内文章落布衣かいないぶんしやうらくふい」と唱しやうす可べき身みにあらざ  
 るを。

屋後おくごに一株いちゆの銀杏ぎんなんあり。秋深あきふかくして、滿樹金まんじゆきんよりも黄きなり。風かぜの風

起れば、かぐや姫の扇にせま欲しき其葉、翩々として翻り落つ。  
 半夜夢さめて、雨かど疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金  
 色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはな  
 く、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人は云ふなる錦を吾は庭に敷きぬ。

## (五)

木の葉落ち盡しては、流石に淋し氣なるも、日影月影いよく多く  
 なりて、空を見星を見るに隙り少なきは嬉し。

## 國家と個人

門毎に國旗あり。到る處に凱旋門あり。

日清の局終へて、今日は大元帥陛下が廣島より凱旋あらせらる可き  
 日なりき。

新橋停車場附近は眞に人の海なりき。老若男女騒ぎつゝ、罵りつ  
 づ、笑ひつゝ、人波うつてどよみあへり。「聖駕奉迎」の旗は紅に、  
 紫に、白く、青く、五月の空に心地よく翻れり。愛國忠君は空氣  
 にありき。

忽ち此人波を分けて、藁積みたる荷車二三臺無理に過ぎむとして、

警官の一喝に遭ひて止みぬ。

忽ち背後に唸る聲を聞きぬ。「何でへ、畜生奴。何が面白えんでい。

わい／＼／＼／＼騒いで居やがる。畜生奴。車力なんぞ如何するん

でい」

余は愕然として顧み、顧みてまた愕然たりき。

余が背後に立てるは、立ん坊の一人なるべし。髪も髯も蓬々と打か

ぶり、澁紙色の顔は更に青黒き色を帯びて怪しく光り、頬骨高く露

はれ、恐ろしく窪みたる眼は惘々としたる中に餓狼の如き凄じき光

を帯びたり。雑巾を綴り合はし、様なる單衣の胸も露はに、繩の帯

して、跣足なりき。

群衆の中に子供あり、食ひかけし饅頭をとり落としぬ。彼繩帯の男、

飛びかゝりて取るより早く忽ち食ひ盡しつ。

彼は實に飢ゑたるなり。

子供は怒りぬ。群衆は笑ふ。余は哭せむとす。

餓程悲しきはなく、餓程恐ろしきはなし。人肉を人に喰はすは餓な

り。パスチールを毀たしめしものも餓なり。

愛國、忠君、其は君が説くに任す。

願はくば陛下の赤子をして餓ゑしむる勿れ。

## 斷崖

## (一)

某の小祠より某の漁村に通ふ一條の間道あり。間道に一處の斷崖あり。約三四十間の間、路は綫の如く絶壁を截つて通ず。上は懸崖、下は海。行人一步を誤る時は、忽ち數十丈の絶壁を眞逆様に海に落ちて、海底の岩に頭を碎き、若くは水死婦人の髪はつの如くに滑めりぬ。揺げる海草に手足をからまれ、氷の如き潭水たんすゐに麻痺まひせられて、人知らぬ死を遂ぐるの外なからむ。

斷崖、斷崖、人生到る處斯斷崖多し。

## (二)

某年某月某日、二個の人此絶壁の道に立てり。

後は「吾」、前は「彼」。彼は吾友、竹馬の友——吾敵、必死の敵。

彼は吾と、郷を同ふし、生年月を同ふし、共に一個の鞦韆しうせんに乗り、共に同一の小學せうがくに學び、共に一同の少女を争ひ、其初四半生は友と云はむより寧ろ兄弟、否多くの兄弟よりも親したしみたり。

而して何故に今敵——必死の敵となれる。

「彼」は成功して、「吾」は夫敗せるなり。

同じ競馬けいばの、足を揃へて發足線はつそくせんに立つ時、其足並あしなみに相違あらん耶。

而して一たび走するに及びては、彼馬は後に落ち、此馬は先に進み、或ものは逸れて埒外に飛び出で、或ものは蹶きて倒る。恙なく先を占めて優賞を得る者は稀なり。人生また實に斯の如し。人生の競馬場に於て、「彼」は成功し、「吾」は失敗せるなり。彼は坦々たる道を踏むで今の位置に上れり。其家は富みたりき。其父母は彼を愛しき。彼は小學より中學を經、高等學校を經、大學を經、大學院を經、斯くて博士となり、位階を得、官を得、或機會によりて夥しき富を得、富も往々にして買ひ難き名譽をも贏ち得たり。

「彼」が斯く成功の段を上れる間に、「吾」は失敗の階を下りぬ。家富

みたりしも、或機會によりて其富を失ひぬ。父母はやがて逝きぬ。年未だ十三ならずして、吾は自ら扶助す可き身となりぬ。然も一片自ら朽ちざらんと欲するの念あり。努力し、自活し、自活しつ、勉強し、斯くて或學校を卒業せむとするに臨みて、吾生命を蝕ふ可き肺患は突然眞身を襲ひたり。情ある洋人あり、吾を憐みて其歸國するに及び、風暖かに空氣清き其本國に連れ行きぬ。病は漸く輕し。吾は恩人の監督の下に其大學に入る可き準備を整へたり。突然恩人は急患によりて死し、吾は異郷に零丁の身となれり。身を屈して使備ともなり、資を得て、住むる所あらむとせしに、病患また發し、吾はせめて故山の土とならむとて歸り來りぬ。婦りて未だ死せず、死

せざる内は活く可き計をなさざるを得ず。吾は一個の通辯となりて、或洋人に従ひ、或海水浴場に来れり。而して殆んど二十年にして「彼」に會ひぬ。

二十年前小學の門に袂を分ちて、二十年後相逢へば、彼は明治の天下に一の重要なる位置を占むる人物となり、吾は半死の一通辯のみ。二十年の歲月は彼を成功の梢に擡げて、吾を失敗の穴に墜せり。

吾心喜ばん耶。

成功はすべての物を金にす。敗者の下ぐる頭は蹂躪せられ、勝者の微かなる一點頭は美德と稱せらる。「彼」は自ら故人を忘れざるを誇り、吾を呼ぶに「君」を以てし、舊を談じて呵々と笑ひ、新を語りて

「氣の毒」と云ふ。而して得意は顔にあらはれ、輕蔑は其鼻にかゝりぬ。

吾心憚びん耶。

彼に招がれて、其避暑の宿を訪へば、兒女家に満てり。其花やかなる夫人の出でて禮するを見れば、誰か思はむ、其昔吾が「彼」と其愛を争ひたる當年の少女ならむとは。

吾心憚ばん耶。

不運は命と雖ども、不運の荷を負ふは、容易ならん耶。志遂げざる止むなきなり。家を成さず、名を成さず、孤影飄零として半死の身を人の世に寄す、命なれば此も止むなきなり。然れど今の「吾」が前

に今の「彼」を立たせ、昔の「彼」を記憶する吾に、今の「吾」を嘲る。「彼」を見せしめ、已に重荷を負はせ、また其重荷を負ふを嘲る。怒罵は忍ぶ可し、冷笑は忍ぶ可からず。天吾を冷笑し、「彼」吾を冷笑す。  
天を情有りと云ふ耶。吾心憤らざらん耶。

## (三)

某月某日「彼」と「吾」と彼絶壁の道に立てり。

彼は前、吾は後。相距る唯兩歩。彼は饒舌し、吾は默然。彼は其肥えたる肩を掉りて行き、吾は瘦せ果てたる體をもて一歩一歩に喘ぎ、

咳嗽す。

吾眼は吾に因らず絶壁の下を覗きぬ。懸崖十仞、碧潭百尺。一指を動かさば、壁上の「人」は潭底の「鬼」とならむ。

吾は頭を掉りぬ。然も眼は潭下に向ひてやまず。吾は終に冷晒ひつゝ、「彼」が濶き背を見つめぬ。熟と見つめぬ。而してまた冷晒ひぬ。

卒然響あり、「呀」と叫ぶ聲吾耳に入りし時、「彼」が體は已に懸崖の端にかゝれり。滑りて落ち、落ちむとして「彼」は一束の薄を攫みぬ。手は薄をつかみ、體は空にかゝれり。

「君」



唯此一秒時、眞蒼になりたる彼が面上には、恐怖失望哀願一時に過ぎぬ。

唯此一秒時、絶壁に突立たる吾が心中には、過去と未來、復讐の快と、同情、さまざまの感一時に湧き起り、相闘ひぬ、余は彼を見下ろして突立ちたり。

「君！」哀叫せる彼が絶れる薄はばり／＼音して根こぎにならむとす。

一瞬時、呀と思ふ間もなく、吾は絶壁の道に腹這ひ、病み憊れたる身の力を鼓して、彼を引きあげ居たり。

吾は眞赤になり、彼は眞蒼になりて、一分時の後は相對ひて絶壁に

立ちぬ。

暫らく惘然として立ちたる彼は、血だらけの手をのべて犇と吾が手を握りつ。

其手をひき離して、吾は轟く胸を押へて立ち、また顫ふ吾手をじつと眺めぬ。

救ひ上げられしは、彼乎。吾にあらざる乎。

吾は再び吾手を熟々と眺めぬ。手には何の汚點もなかりき。

(四)

翌日、吾は獨り其絶壁の道に立ちて、上天に向ひて吾が救はれしこ

とを感謝してありき。

斷崖十仞、碧潭百尺。

吁吾が昨日立ちしは獨り此斷崖に立ちし乎。此れ吾一生の斷崖に立ちしにはあらざる乎。

晚 秋 初 冬

(一)

霜落ち、木枯らし吹き初めてより、庭の紅葉門の銀杏しきりに飛び、晝は書窓を掃ふ影鳥かと疑はれ、夜は軒を撲ちて晴夜に雨を想ふ。朝に起き見れば、滿庭皆落葉。眼をあぐれば、さても瘖せたり。楓の梢、錦は地に散り布きて梢には昨夜の風に残されし二た葉三葉四葉心細氣に朝日に光り、昨日まで黄金の雲と見し銀杏も今朝は膚薄う骨あらはれ、晩春の黄蝶にも似たる殘葉の猶此處其處に縫りつきたるもあはれなり。

## (二)

斯頃の晝こそいと静かなれ。朝は霜夕は風の流石に寒けれど、晝は空青々と高く澄みて、日光清く美し。窓に對して書讀み居れば、都に住むとしも思はれぬばかり静かなるに、時たま障子にうつる物の影、何ぞと障子開けば、庭の李樹の葉は落ちて槎枒たる枝の縦横に青空を嵌みたるに、梧葉にや大きな枯葉の一とつ落ちかゝり、猶落ちもやらで静に日光に光りたるもおかし。庭も寂びぬ。霜枯れの菊俯きて影を落し、鳥の啄み残せる南天の實の金剛纂の下に紅う照れるも、華やかならずしていと寂びたり。雀

三羽庭に下りて餌をあさる。椽には老猫の目を浴びて眠りぬ。蠅一とつ飛び來りて、障子を這ひありく音かさゝくと聞ふ。

## (三)

邸の内も寂びぬ。栗も银杏も桑も楓も椶も榎も皆落葉して、月夜には其影限りもなく地に亂れ、踏み分け兼ねる心地す。落葉焚く煙邸内其處此處に立上りて、茶の花ほのかに香る夕、はらくと時雨栗の落葉をたゞきて、ぼいやりと黄昏れ行く頃は、西行ならば歌讀まむとぞ思ふ。暮雨瀟々、今行き過ぎし傘より音一入まさりて、世は此雨の中に果つ可く思はる、夜は、默然として吾に伴ふ吾影もあは

れなり。

(四)

月色げつしよくほのかなる夜に、ほの白き銀杏いちょうの落葉おちばを踏ふみて庭に立てば、月一いっしきりきり薄うすれて、はらくくと木の間洩まり來きる二點に、三點さん。時雨しぐれ―と思おもへば已やに止とみて、また月つきになり行く。此趣このおもむき誰たれにか語かたらむ。月つきなくて、寒星かんせい空そらに満みつ頃ころ、木この下もとに寂然じやくぜんとして佇たてめば、夜氣やき凝こりて動うごかず。良久やうひさしふして大氣たいき少すくしくふるひ、頭上づじやうに枯梢こしやうの相あふるゝ音ねあり、足下あしもとに落葉おちばのがさりと云いふ響ひびあり。一瞬いつしゆんにして止とむ。星ほしの語かたれるにあらずや。

月霜つきしもの如ごとく地に冴さへ、風海かぜうみの如ごとく空そらに吼ほふる夜は、人籟じんらいすべて絶たえて、直たちに至上しじやうの聲こゑを聞きく心地こころちす。

## 夏の興

## (一)

十二歳の夏、京都梅尾の寺に避暑したることあり。寺の下に一道の清流あり。一處藍を湛へて淵をなし、淵の上に岩ありて突出でたり。

日盛りに、二三の友と近所の村に行きて西瓜を買ひ來り、之を溪流に冷やすと稱して、或は岩上より抱いて躍り、或は争い奪はむとして互に水を潑し狂ひ廻れば、淵は雪を沸して、三人が眼眩る間に、水は窈かに綠玉塊を奪ひ去つて、浮焉没焉流し行く。餘りに争ひ

て、岩角に西瓜を破れば、おのゝ其一片を泳ぎながらに食ふ。多半は是れ水なり。

寺の坊主等小河童連と云ふ。眞に河の童なりき。

## (二)

故郷の姉の家に清冷水の如き井水あり。井戸の側に綠葉翠蔓一面に這ひ廣がりて黄花處々に咲ける南瓜の畑あり。午下二點、蟬聲耳を煎りて、睫に千鈞の重里ある時、跣足になりて井戸側に走り行き、一種の水を汲みて高架の上に置き、南瓜の蔓の彎曲せるものを伐りとり、桶にさして導水管とし、赤條々になりて頭を冷やす心地今に

忘れ得ず。

## (三)

富士を下りて、中畑より友とおのく馬に騎して御殿場の方へ行く。  
 姫百合車百合撫子桔梗、其他あらゆる夏秋の草花淺茅にまじりて、  
 畫の中を行く心地あり。馬を牽ける小娘を喚びて、折らすれば一抱  
 ばかり摘み來りぬ。馬首に載せて、其香色を愛でしが、後には吾前  
 に海水浴帽を冠りて馬背に跨れる友を、背後より花の礫にうちて行  
 く。

中畑を出でし時は、午に近き日の光赫々と頭上より照りつけ、馬上

に汗を流しぬ、半里ばかり行く程に、忽ち般々の響起りて、愛鷹山  
 の邊りに一團の黒雲湧き出で、見るく東南の空に廣がりつ。水氣  
 を含める風颯と面を吹き來りぬ。眼を上ぐれば、赫々と照りし日光  
 かき消す如くに去りて、物の影は地の上に消へ、野原も森も鬱とし  
 て曇りぬ。馬は心地よげに鼻を鳴らして行く。

「よられつる野もせの草のかげろひて、涼しく曇る夕立の空」と云ふ  
 西行の歌の妙を、此時知りぬ。

## (四)

前に云へる姉の家は、不知火燃ふる海邊にありて、天草に近く、大

小の島勝手次第に横はり、水は深けれど碧玉の如くに澄みて、島々  
の間を洄り、川となり、湖をなし、悠々として水も宛ながら游べる  
様なり。地方と島、島と島の間、狭き所は、小聲にも話す可く、馴  
れたる小供は盪を浮べて渡る。所謂「島間海爲潤、渡船小於瓜」なる  
もの。

江村八月碧鱸まさに肥へたり。親戚知友三四人、一葉の小舟に釣具  
鍋釜、米、皿碗、醬油何くれとどりのせて出づ。日は熱けれど、水  
上微風あり。島影静かなるあたり舟をとりめて、おのゝ綸を垂  
るゝに、船頭の釣には尺近き鯛一尾碧鱸小なるもの兩三尾を獲たれ  
共、素人の我等が釣には稀に雑魚のかゝるのみ。腹立たしきこと限

りなし。已に日も午に近づきぬれば、彼方に釣れる漁舟を喚びて、  
更に碧鱸の大なるを買ひ、舟を島根の松に繋ぎて、船頭が飯炊き肴  
作る間に、肱を枕に横になりつ。日の眩しさに乙女ならねど袖を顔  
に掩ふてあれば、吾背の下の舟底をびたりと舐るが如き水の音  
揺々と身は搖籃にある心地して、何時か夢路を早や三四里も行さし  
と思ふに、突然雷の鳴るに驚かされ、眼を開けば、船頭か「客人、  
飯が出来た、起きさつしやい」と喚ぶなりけり。

簀板を膳にして、飯と汁とは碗に盛りたれど、刺身は大皿に山盛り  
にして、一の茶碗に醬油を添へたり。潮水にとぎたる飯は些し鹽氣  
ありて却つて甘く、船頭が錆びたる出刃一挺の手料理、鯛も鱸もぶ

つゞ切りの、刺身は大工が手斧の下に飛ぶ木片よりも大なれど、甘さは頬も落ちむばかり。喫し終れば、島に上りて人家の井水に咽を濕し、歸れば衣を脱ぎて舟の上より海に飛込み、一泳してまた一睡。日傾きて風をよくと水面に流れる頃より、舟を移してまた綸を垂る、程に、日はますます傾きて、終に落ちぬ。島は一つ、次第に暮れて、明らかなりし水の面溶々と紫を流し、やがてまた白くなりぬ。

舟を返へせば、呻啞と響く櫓の音の一つ毎に空の星は殖へて、影水に落つれば舟は空を行く思あり。黒き島々には、ほのかに燈光のさすもあり。人無くして虫の音をのみ載せたるものあり。行くまゝに

空も水も闌らなりまさりぬ。櫓搖けば、碧火花の如く亂れ、鱗鱗の類右に左に倏々と走りて、水に白光を湧かす。夏の夜の更け易き、歸れば江村寂として黒く、虫の音のみしげく聞へたり。

## (五)

或夜頭熱して眠らず、起きて庭を歩するに、黒樹を漏り來る月の光碧にして雨の如く、蟲聲四に聞ふ。行きて井戸端に到り、繩を手繰れば、月ゆらくと釣瓶の水にあり。口づから月光を吸ひ、あまれる水を覆せば、月影たらくと滴り落つ。あまり美しさに、また一釣瓶、猶一釣瓶、三釣瓶の水をこぼして、猶暫し蟲聲、樹影の中に



立ちぬ。

(六)

逗子つしにある日、暑甚しよしき時は、麥藁むぎわらの海水帽かいするぼうを頭かしらにかぶり、赤條せきじやう々となり、小舟こぶねの櫓りゆうを押して、獨り前川ぜんせんの人無き所に到る。御最期川ごさいごがわの兩支流相合する所は、藻もの間に深ふかき窪淵くぼみありて、魚の巢窟そうくつなり。舟を此處こゝにとどめて、或は舟上より釣つり、或は新聞しんぶんを讀み、或は釣つりを垂たれたるまゝ、舟板ふないたに肱枕ひぢまくらして午眠ごみんす。醒來さめきたれば、魚うをの釣竿てうかんを引ひき去り居おることもあり。七寸位の鯨ほほのかゝり居おることもあり。右の支流相會あひあふ所、青蘆洲せいろうしゆうあり。蘆洲ろうしゆうの上には松生まつおい、松まつの下草したぐさには赤百合あかゆり、撫子なでしこ、日あふぎなど咲さき、虫聲むしこゑも聞きふ。洲しゆうのあたりは

皆軟砂なんさなり。或時舟を此處こゝに寄せ、上のぼりて赤百合あかゆりを探たづねて歸かへるに、朝日紫あさひむらさきを流ながして淺水宛せんすいながら水無みづなきが如ごとくなるに、日影ひかげの片かけの如ごときもの水中みづなかに在あるが如ごとく無なきが如ごとく動うごくが如ごとく動かうごかざるが如ごとし。諦てい視しすれば芝海老しばえびの游あそぶなり。彼が體透明たいとうめいにして、水其もの塊かたまれるに似たれば、遽はなかに認みとめ難がたきも、其動うごく毎たびに彼が影かげの黒くろく水底すゐていに移うつり行くにて、其れと知らる。よく見れば青蘆せいろうの根ねにも、水淺みづあき砂すなの上うへにも、幾箇いくつともなく游あそべり。手をもつて捉とらへて、須叟すゆに一籃いちらんの海うみ老おを獲えたり。

水濁みづにごれば、釣つりの獲物えものいよゝ多おほし。雨勝あめがちの日、襖衣しやついちま一枚いちまいになり、川中かわなかに入り、竿さを水面四十度の角かくさしほに挿さみて、靜しづかに魚うをを待まちつ、水流茶すゐりやちや

褐色に濁りて、膏の如く淀み、竿と綸の影倒に移りて、物と影と  
 共に不規則なる三角形をなしつ。水中に立つこと久しければ、吾足  
 を杭と心得てか、蟹などの這ひかゝるも可笑し。  
 忽ち空一段闇み、水の面にぽつりと一つ雨點の落ちて蛇の目を畫く  
 と思へば、ぽつ／＼／＼落ち來りて、渦紋渦紋と亂れ、果てはざあ  
 としぶきて水面さゞめき立ちぬ、眼を上ぐれば、細き水晶簾空より  
 川の面にかゝりて、小坪あたりの山は茫とかき暮れ、つい其處の松  
 林も半に有無の間に入りぬ。  
 間もなく雨はまた忘れたる様に止み、水はいよ／＼とろりと淀み濁  
 りて、たつぷり水を含むで色濃き青松林の影も塗れるが如く映りぬ。

釣竿の尖より綸を傳ふてぼてりと雫の落つれば、罔波川の面に廣が  
 り行く。  
 歸る時、魚籃には鰻鱈満てり。

## (七)

大人子供三四人沖釣に出で、時経る程に、富士の此方に渦まく銅  
 色の綿雲の奥に般々と雷鳴り出でつ。然も海上は靜かにして、一波  
 だも動かす。

大島の方を眺めて、夕立來可しと船頭の云へる程は、我濟が眼には  
 何も見へざりしが、猶も沖の方を眺めて「來る、來る、さあ來たぞ

——来たぞ」と船頭の云ふが中に、成程沖の方黒ふなり来て、一里ばかり彼方を駛り居たる舟の狼狽へて帆を引下ろすよと見れば、其あたりの海の面鱗々と皺立ちぬ。大海を渡り来る驟雨の速さ。それ舟を戻せと云ふ間もあらせず、彼眞黒さもの見るく、押寄せ来りて、冷風颯々と面を掃へば、舟の四周は忽ち億萬の水簇一時に跳るが如く騒立ち、忽ちにして簣板に逆る白雨、一點、二點——千萬點。須臾に我等が一葉の小舟は黒風白雨の重圍に陥ちぬ。傘も無く、ありても翳す様無ければ、敷きたる藁座を三四人して引かつぎ、成人子供一枚の蓆の中に打笑ひつゝ、舟底に蹲れば、電光雷鳴舟を繞りて、迸る雨に袂も裾も絞るばかりになりぬ。

## 雨後の月

### (一)

わたしは不斷そう思ふのですよ、人間は何如様な事があらふと決して自棄を起すものぢやありませんね。それはもう海人が鹽焼くと云ふせち辛い世の中ですもの、五十年七十年の間には随分憂ひ事つらひ事、たまには死にたい程くやしい事もありますわ。意地の悪い天道様自分一人を繼子になさつて、あゝいやだくいつそ舌でも咋ひ切るか、淵川へでも身を投げて仕舞はうと、斯う思ふこともあるも

のです。でもね、此處が人間一生浮沈の別れ時で、斯の處を眼をねぶつてちつと持堪へて居さへすると、天道様の秤はすぐとまた逆戻り、沈むだものは浮き上つて、枯株にも芽がふきます。此處の辛抱が出来ないで、つい自棄から一生をさへはうさにして仕舞ふと云ふは、情けない譯ぢやありませんか。よく昔話に云ひますね、苦勞の重荷を背負つて居る人間が他人の荷物は輕そうだと羨むで居るのを、天道様が慥れと思召して、それなら荷物の取り替へつこをしると仰有つたので、皆喜んで自分の荷物を放下して、偕他人の荷物をあれこれと背負つて見ると、是はしたり、何れもく、吾荷より餘ッ程重いものばかり、餘儀なくまたもとの吾荷を背負つたと云ふ話があ

りませう。誰の身にも荷物は有りませアね。坐蒲蒲で拵へた人形さまを背負つて居る花ちゃんでも、ね、日本を肩に背負つて居る何某の大臣さんでも、皆それく、荷物はありますよ。わたしなんどは斯様な見るかげも無い獨り者、其でもね、笹の一葉も露とやらで、わたし相應に些とは背負つた荷もありますの。あなた方はまあ是れからが蓉み咲くと云ふのですから、面白い事も澤山ありませうし、また随分つらい事もあります。何の御爲にもなりませんまいが、今夜は一つ此間から皆様の御望のわたしの素生の話をしましやうね。さあ美しいさんも露ちゃんも徳ちゃんもずつと此方へ御寄りなさい。エ、眠りつこなしですよ。今夜は蚊が居なくて宜いことね。あや、

ランプが消へてしまつた。なに、徳さんようムいますよ、此様に疊の上まで月がさしますからね。お、涼しいこと。御覽なさい、櫓の葉がきら／＼、まるで玉ですね。では話しますよ、ようムんすかいおほ／＼、あらたまつて話し家の様ですね。

## (二)

よくソレ西國中國邊で歌ふ「船頭可哀や音戸の瀬戸で一丈五尺の櫓がしはる」と云ふ舟謠を知つて居ますかね。知つて居まじやう。わたしはね、其音戸で一と云はれた酒家の一人娘でしたの。今ぢや人

の有になつてますが、わたしの家は田舎での大家でね、腥い藁葺や矮い瓦屋の真中に轟然と立つた白壁の土藏造りは随分入舟の目標になつたもので、今でも汽船であの邊りを通つたら、依然青々として潮の流れに映つて屹と立つて居ると思ひますよ。船つきと云ふものは、ドウも風儀が悪くツてね。ですが、わたしの内では珍らしい堅氣揃ひで、奉公人も大勢使つてましたが、短くても五六年長いのは二十年も三十年も勤めたと云ひます。でもね、災難の降つて来る時は致方のないもので、父はわたしがまだ母の乳房を啣へて居る内に、灘へ何か仕入れに行く途中で難船して、水島灘の藻屑になつて、それからと云ふものは母もがつかり弱つて、つい其秋風邪から病み

ついで、わたしをひしと抱きしめたまんま泣き死に、死んで仕舞ま  
してね。思へば此がわたしの一生の不仕合の始でした。それからわ  
たしは父の實弟で荒物屋をして居た叔父の内に引取られて、家業は  
叔父の監督で永年勤めて居た實體な番頭にやらせる事になつたそ  
うですが、何を云つても親のない者ほど哀れな者はありませんわ。お  
金／＼と近頃は金ばかり持囃す世の中になりましたが、億萬圓でも  
買はれないのは親の愛でせう、なんぼお金があるたつて、牛乳羊乳  
は買つても飲みませう、乳母は雇いもしませうが、母親の乳房は買  
はれませんまい。わたしも其頃はまだあんよが上手の頃でしたから、  
何の譯も知らなひで、たゞ母に別れてから恐ろしく虫氣が起つて夜

晝啼通しに啼いて居たそうですが、段々大きうなるにつけて終始思  
ふのは此事ばかり、今日が日までもあゝお母さんが居たらお父さん  
が御出なすつたらと思はぬことはありませんよ。兎角人間と云ふも  
のは我儘なもので、親が達者で居る間は勝手氣儘も云ひもし爲もす  
るものですが、さあ別れると唯もう「なきてぞ人は戀しかりける」  
で、あゝ悪かつた、と氣のつく時は最早親は無言の石塔——あゝ話  
がわさへそれましたね。

わたしの叔父おぢさんはそれは／＼好い人で、夜食よしよくの膳ぜんで一盃はいやりながら、わたしが部屋へやの隅ぐもなどで飯事まゝごとでもして居ると、ちいつと見ながらほろ／＼涙なみだをこぼしたのですが、叔母おばは中々勝氣しょうきな方でわたしも叱しかられ／＼しました。人間にんげんは一寸ちよつとしたはづみで善くも悪くもなるもので、叔母おばなんでも決して悪人あくにんではなかつたのですが、子供こどもが多い處ところへもつていつてわたしが世話せわをかけるやら、それから人情にんじやうは妙なものでね、わたしが兩親りやうしんないものですから家うちの前まへで鬼子おにこツとして居ても通りかゝりの者が「お嬢ぢやうさん、よく御遊おあそびなさいますね」とまづ先さきにわたしに愛想あいさうを云つて行くので、叔母おばも何か自分の仕打しうちに不足みでも見られる様に妙めうに氣きを悪くするやら、生憎あいにく從妹じやうまいは麻疹はしか

てわたしは達者たつしやであつたり、小學校せうがくかうでもわたしは一番ばんなのに皆みなは一向かうで出來きなかつたり、何やら角かやらで叔母おばも其處そこはドウしても生さぬ中なかの事ことですから苦くるい顔かほも見せれば隨分ずいぶん敲たたいたり抓つかつたりすることもありました。是これは人情にんじやう致いたし方かたもない處ところですが、する方は兎うに角か、せられる方は本當ほんたうに憐あはれなものでせう。わたしも斯様このやうな事ことから恐こはい、悪わるくい、怨うらめしい、悲かなしいと云ふ事ことを覺おぼへて、偽詐うそもちつとは言いひ習ならひ、子供こどもにあるまじい物思ものおもひをすることもありましたよ。今いまでも覺おぼへて居ゐます、從妹じやうまいが叔母おばの針箱はりばこを破こしたのをわたしの所爲せいの様にひどく叱しかられて、父母はふふの墓所はかじよに逃にげて行いつて、嗚咽しやくりあげながら墓はかを眺ながめて「あゝ此下このしたにはお父とうサンやお母かあサンが御出ごでなさる、わたしも

はいりたいなあ」と思つたりして、丁度夏の頃ですから、あのソレよ  
 く墓場にさくぼんやりした黄ろい、ね、月見草の花を摘んで、それ  
 から夕日の黄ろく照りつける草の中に寝ころんで、墓石に映つた槐  
 の影のちらちらと躍るのを見て、頭の上につくつくはうし  
 と鳴く蟬の音を聞きながら、何時の間にか泣きなりに睡つてし  
 まつて居たので、叔父の方ではわたしの行衛が知れぬと云つて大騒  
 ぎして、やうくわたしが墓場に寝て居たのを捜し出し、此れは屹  
 度お前が悪い此様な事で姉様や兄様の位牌に顔があはされるかと叔  
 父がひどく叔母を叱つた事もありました。併し何と云つても家の實  
 権は女にあるのですから、叔父から一とつやさしく云はれる所では

叔母から十も二十も睨まれると云ふ鹽梅で、私も餘ッ程小供らしい  
 自然な性質を失つてしまひました。決して怨むぢやないのですが、  
 今でも早く兩親に別れた子供でも見ると、吾事の様にしみます  
 よ。

其内叔父は果てますし、叔母は如何様な心でしたか廣島の者で人の  
 好くない四十男を後夫にしたので自然縁家親類の間も遠々しくなつ  
 てしまつたのですが、世の中には随分いけない人もあるもので、其  
 後夫と云ふ男がドウして叔母を欺したのか、わたしを追出してわた  
 しか家の身代を取つて仕舞はうと謀つたものですから、亡くなつた  
 母の弟がそれと聞きつけて、其様な奴等に大事な姪は預けぬと非常



に立腹して、親類會議を開いて、到頭わたしを引取りました。叔父の内に移つて暫らく経つと、叔父は活計むきの都合で音戸の家をたゝんで東京に引出ることになり、それについてはわたしも共々引出た方がよからふ、また何百里かけて家藏の世話出来るものでもなければ、いつその事公債にでも引換へて置いたがよからふと云ふことで、幸ひ望手があつたものですから、わたしの本家は家屋敷土藏から道具器械一式揃へて株ぐるみ悉皆其人に譲つて父の死後店の事を任して置いた番頭は叔父と前後に亡くなつて、此頃は店も暫らく休むで居ました。それから田畑や貸金なにかは親類の手堅い者へ頼むで、東京に引き出ましたのが、わたしが丁度十五の春でした。

其れから後は一々話せば長いですが、叔父は麴町一丁目の北側に唐物店を出して仕合はせに景氣づきますし、わたしも半年近く兎や角と家の事に従妹に加勢して居ましたが、叔父も斯様して置いては濟まぬと云つて、わたし共をつひ近所の開化女學校へ遣るとになりました。わたしも其以前亡くなつた叔父の内に居た頃は、あまり叔母ががみ／＼叱るものですから、つい拗けもすれば曲りもし沈みもする様になつて居たのですが、年若な時分は浮標も同然抑へ手がありさへせぬに直ぐ／＼浮き立つて来るもので、別して此叔父の内に来てからは叔父叔母従兄妹まで親切に全く家内の者にして呉れたのですから、あたりは珍らし、賑やかだし、わたしも最早自分の

不幸は打忘れていそ／＼學校へ通つて居ました。其内都珍らしい正月の數も重なつて、上野淺草左程に遠くも思はない様になつて、十九と云ふ年になります。斯う云ふと可笑しい様ですが、わたしも其頃は此様な見すほらしい風はして居ず、毎も髮結に「御嬢様は御器量が好くて居らつしやいますから」など、萬更御世辭ではなく言はれた事もあつた位で、叔母も叔父も内々わたしを此まゝ此家の從兄の嫁にと思ひ込むで居たらしく、まだわたしには明白それと言はなかつたですが、何時か湯の歸りに奥の椽側で「彼の心を聞いて置いた方が大丈夫ぢやないか」なにあなた、不承知なんぞ云ふものですか、大丈夫ですよ」と叔父叔母の聲を漏れ聞いた事もありました。

233

此從兄の欽一郎と云ふのはわたしに二つまさりで、其頃は軍人になるとか云つて陸軍士官學校に入つて居まして、誠にさつぱりした男で、わたしも子供の時分から一處に育つて見れば兄弟の様に思はれて隔てなくして居たのですが、其處が不思議の世の中で、わたしの心は最早其時は他人の有でした。わたしは學校の往き返へり此一年ばかりが間毎日の様に行き逢ふ人があつたのです。年の頃は二十四五、何時も洋服出立のさつぱりとして色の白い、髯の黒い、今から思ふとおほくくくと随分にやけた人でしたが、其頃は眼の前にぼうつとした薄霧のかゝる時代ですから、大層立派な方だと思つて居ました。處がね、ほんに小説の様な

御話ですが、靖國神社の祭禮の晩でした、花火を見に行つた歸り道、連にはぐれて獨り御濠際を歸つて來ますと、大勢酔つぱらつた奴等に出あつて、連がないと侮つたのか通せぬ路をしたりなんぞするのでせう。わたしは恐いよりも人の眼の前が慙かしくて如何せうかと途方に暮れて居ると、後から洋服着てステッキ持つた方が「あ、お前此處に居たのか、ひどく搜がしたぞ」と云つて、わたしを引立て、ずん／＼通りぬけたのです。わたしは二度喫飛してフット其人を見ると、瓦斯燈の明りですぐ分かりました、それ毎日顔見合はす其方なんでせう。あ、御自分の連と思はして其場を救つて下すつたのだと心づいて、ほんに嬉しく思ひました。若い時分は一寸した事

でもしみ／＼身に浸みるもので、斯様な事から一生をだいなしにするこどももあり兼ねぬもので、ウツかりしてはなりませぬ。それから叔父の家まで送つて下すつたのが縁になつて、始終遊びに來るのです、三菱銀行―其頃はまだ駿河臺にあつたのです―の社員とやら、中々容子の好い伶俐な如才のない人で、うまく調子をあはせるのですから、田舎氣質の叔父叔母従妹まで好い方だと云つてよく持てなしたのです、従兄ばかりは俗物だいけない奴だと嫌がつて、日曜でも顔あはせるとひどく氣分を悪くしました。其内段々近しくなつて、わたしの身上も何時の間にか知られて、それからはいよいよ以て親しく圓滑に持かけるのですから、何の分別も經驗もなか

つたわたしの中で、しみじみ嬉しく思つて、實は内々叔父叔母のわたしを従兄に妻す心算は氣づかなかつたのではないのですが、ついでか／＼と其人の口車に乗つて、叔父叔母さへ承知致したならと斯う云つてしまつたのです。叔父叔母はひどく失望しました。失望もすれば不快にも思つた様子でした。併し叔父叔母もまだわたしを欽一郎にと云ふ事は相談かけたこともなかつたのですから。まさか内内の嫁にするから外へは出来ぬとも云ひ兼ねて、好い人達ではあるし、わたしも本家の女と云ふに少しは遠慮もあつたので、先方は催足する、わたしは不承知でないと云ふ間にはさまつて、到頭ならぬと云ひ兼ねて、不承／＼に承諾してしまつたのです先方の身分取

しらべるのも實は表むき丈で、早速結納の取かはせも済む、先方からわたしの財産を一應聞きたいと云ふので叔父はつひわたしの名になつて居る公債證書地券などわたしの印形ぐるみ器械的に先方へ渡して了うと云ふ、鹽梅で、わたしは何が何やら夢の様な心地でした。

## (四)

併し夢の様な心地の中にも従兄の欽一郎が右の話を聞いて黙つて一言も云ひはしなかつたのですが恐ろしく顔を蹙めたのがそれは／＼

氣にかゝつて、叔父叔母もわたしの爲めにいそ／＼婚禮の仕度をして呉れはしますが、如何しても浮かぬ顔色で居るのが是れまた氣にかゝつて、何だか叔父叔母や従兄に對して濟まぬ様な欺した様な氣咎がして、其所爲でもありますまいが、ひどく頭痛がし出して、婚禮の一週間前と云ふ日からドット床についてしまひました。最初は朝晩に熱が出て、それから身體中の血が湧いたり冷へたり痛い様な搔きむしりたい程痒い様な心地でしたが、其内顔から手足まで一面に赤みかゝつた紫色のものがぼつ／＼出來て、醫者に見せると、さあ大變、天然痘だと云ふのです。叔父も叔母も大騒ぎして到頭わたしを第二醫院に入れることになつて、釣臺にのつた迄は覺へて居ま

すが、其あとは唯茫として始終蒸風呂の中にでも居る様な地獄にでも落ちた様な積りで夢心地に熱い／＼と思ふばかり一切夢中であつたので、ぼつかり眼を開いて長方形の部屋の中に寢臺に臥て居ることに氣づいて「あゝまだ生きて居た」と思つたのは入院して二週間も立つての事でした。餘程ひどい熱だつたそうで、醫者も望を絶つた位で、幸ひ一命を取りとめたのですが、顔容は見る影もなく變つてしまひました。

熱が退いて正氣づくくと直ぐ浮むだのが「結婚」と云ふことゝ、また「此病氣が結婚の邪魔になりはせまいか」と云ふ心配でした。わたしの國の親類内に矢張り天然痘をわづらつた者があつたのですが、

直つた當座はまるで焔硝怪我でもした様に顔一面赤黒くなつて、それが段々よくなること、彼處も此處もぼつ／＼孔が見へ出して、それはもう見られたものではありません。ドウか彼様にならぬ様にしたものだと念つて、可笑しい事ですが、痲一とつ剝がない様に用心して居ました。掛念はしたが實は知らなかつたのですよ、叔父も叔母も黙つて何とも云はず、お醫者も看護婦も何とも云はず、鏡も見せて呉れなければ、わたしも何だか鏡を見るのが恐くて、玻璃障子や藥瓶でも見ぬ様にして居たのですから、それから退院して叔父の内へ歸つて來ますと、知るべの者が退院の喜びに來ましたが、皆わたしの顔を見て笑止な顔をして歸つて行きます。さては自分の顔が

變つたに違ひない、それでは結婚も出來なくなつて仕舞はうか、愛想つかされうか、まさか彼の親切な方が結納まで済むで居るわたしが少しばかり容貌形姿が變つたと云つて振り棄てはなさるまい、なさるまいと思案しながら、椽側の柱にもたれて桔梗の鉢に蝶の一ツ飛んで居るのを眺めて居ますと、靴音がはつと胞にこたへました。彼人が來たのです。わたしが入院して最初二三度はデセルの鐘など持つて見舞に來たそうですが、其後はさつぱり音沙汰なしで、今日退院の知らせをしたから來たのでせう、弗と椽側に立つて居るわたしを見て一寸思ひ付かぬ風でしたが、やう／＼「イヤ、失敬しましたと」挨拶するのでせう。わたしは耻しいと苦しいと心配と一時に

こみあげて、かつと上氣して、碌々搦揆も出来ません。先方では一向頓着なしで、何か暫らく浮世話をして、別に何にも云はず、勿々に歸つて行きました。歸つたのは好いですが、歸り際になつとわたしの顔を見て、眼と唇の何處やらにそれは／＼冷たい輕蔑すむだ色を見せて、にやりと笑つたのをちらりと認めたのです。わたしははつと思つて、吾部屋に籠つて、襖をしめ切つて、震ひ／＼鏡を見た時の心もち！一眼見て「アッ」と吾れながら叫びました。あの位の大病だからよもや無事ではあるまいと思ひは思つたが、此れはまたあんまりな變り様。菊石と云はうか、柘榴の内皮と云はうか、鼻の尖から顫の下兩耳にかけて唯もう一面の黒痘痕、眼ばかり光つて居

て、口は右の方へつりつけ、髪はばり／＼ぬけて、二た目と見られた容態ぢやないでせう。わたしは突然鏡を庭石に擲きつけて一晩泣き明かしました。

## (五)

若い女しかも嫁入際の若い女の器量を落して仕舞ふのは、中々天下取りのナポレオンが島流しされたよりもつらいものですよ。なまじひに御器量好しだの美人だの云はれた丈に、わたしも心から口惜しくて、此顔を寸々に切り裂いて、世の中の女と云ふ女の顔を扯さむ

しつて、出来ることなら此世界を打壊しても仕舞ひ度く二日三日は碌に口もきかないで、部屋に引籠つて居ました。彼人の方から其切り何の音づれもしません。其方はわたしも最早望を絶つて居りました、如何して此顔を下げて厚顔しく嫁にと云はれませうか。併しそれならそれと男らしく言つて來そうなもの、氣の毒と思ふ位の人情はありそななもの、恨の念は満ち／＼て居たのです。其内八月の十二日になつて、丁度今夜の様な涼しい月夜でした、わたしはちつとは氣晴らしにもならうかと、そつと部屋を出て、唯つた一人で九段の公園の方へぶら／＼出かけました。あ、去年の此處の祭りの歸り途だつた、彼の人の世話になつたのが始まりで、もう結納まで取

りかはす段になつて、此様な事にならうとは、あゝ情けない、と思ひながらほろ／＼こぼる、涙を袂で拭き／＼櫻の影眞黒い中を通りぬけて、靖國神社裏手の泉水の側を歩いて居ると、泉水の向ふ側から突然に忘れもせぬ男の聲で、「其様な事があるものですか」と云ふ聲が聞へたのです。はつと思つて向ふを見ると、今櫻の蔭から月影へ出た浴衣二ツ、右は確かに彼人、左は島田の女でせう。胸を撞き破る様にうちだす動悸を両手でじつと抑へて、わな／＼震ふ唇を喰ひ切るほど噛みしめて、ちつと向ふを見つめて居ると、此方は蔭ですから一向氣もつかずに二人いやらしく寄添つて歩いて居ます。男は彼方向いて居て、顔は見へないですが、何か媚びしなだれた様な





いて、番町のあたりを無暗に歩るきました。何だか茫と夢の様な中にも、神経は恐ろしく鋭くなつて、國の父母の墓所の光景や、叔父の家や、従兄の顔や、叔母の顔や、學校の事や、病院の様子や、今の九段の様子や、鏡に見へた自分の顔や、洋服着た彼人の姿や、自分の葬式の光景や、何もかも一時に走馬燈の廻る様に浮むで、今歩いて居るのは番町でもあれば死んだ後の様にも思はれて、眞暗い陰になつて居る巷路をぼと／＼歩るいて居ますと、其眞黒い中からはつと光明がさして來ました。それから何やら歌ふ様な聲も聞へるのです。何の事だが暫らくは一向分からなかつたのですが、餘ッ程立ツて此は讚美歌を歌ふので、此處は一二度は引張られて來た事もあ

る耶蘇教の會堂だと云ふことが解りました。わたしは耶蘇教が大嫌ひで、と云ふのは何の耶蘇教を知つて何處の所が嫌ひと云ふではなく、唯耶蘇と云ふ其名から嫌ひで、蟲が嫌ひで、嫌だ嫌だと云つてましたが、此時其歌の調子が何やら憐れつぽくもう今夜死ぬると云ふわたしにしみじみ覺へたので、ふつとはいり込んで聞いて居ますと、其歌は

さまよへる者よ、

立ちかへりて

天ツふるさとの、

父を見よや。

と云ふので、つひ其節の美しいのに聞き惚れて一句一節耳を傾げて居ると、其美しい節に包むだ美しい文句が油の様に身にしみ渡ッ

て、何だか母の懐よところにでも抱かれて其和そのやほらかな手に背を撫なでられる様な心地こころがして、わたしは身震みふるひして顔を押しへて泣なき出しました。歌は猶つゞいて、やさしい愛あいの言葉は耳から電氣でんきの様に全身にしみ渡る、涙なみだは泉の様に湧わくわたたしは浮く程泣いて、涙の下から石か鉛なまりの様に固まつて居た胸むねさきは段々にくつろいで、ちつとは心も軽かろくなつた様に思おもはれたのです、それなら嫌きらひな祈禱きとも吾れとはなしに頭あたまが下がれば、説教せつけうもよくは分からなかつたのですが、何どうやらわしの爲ばかり云つて聞かせる様な心地がして、あゝほんとに悪わるかつた、天道てんたうさま様が見ていらつしやる、此様な事で死んでは済すまぬ、わたしは不仕合ふしあはせでもわたしよりも不仕合せな人があらう、是これから心を

入れかへて人間になりませう、と思おもふではなく感かんじて、今夜の事を忘わすれますまいと心に誓ちかひました。それから會堂くわいどうを出た所で、丁度從兄わすがわたしの居ないのを心配しんぱいして從妹わすと一所にわたしを搜さがしに来るのに出あつて、叔父の家いへに歸つて、此一夜の事を思おもふとほんに夢の様でした。

叔父も叔母もひどく先方せんぱうの不人情おこなを怒おこつたのですが、其様な人にはいくら云つても黙目ためですよ。其れ所か、聞き質かきしつして見ると、ひどいぢやありませんか、わたしが財産ざいさんはすつかり自分の名義めいぎに書き換へてしまつて、叔父が怒おこつて裁判さいばんにかけると談たんじつけると、此方では正當てうたうな手續てつぎを踏ふむで登記てんきも濟すむで居るから法廷ほふていに争つても差支さしつかへは

ないと云ふのです。従兄の欽一郎は切齒してピストルでも持ち出し  
 そうでしたから、わたしはどめて、其様にお金が欲しいのなら呉れ  
 てやりませう、わたし一人の身過は何しても出来ることですから、  
 と云つて、公債や地券なにかは一切呉れてしまい、契約も此方から  
 解いてやりました。金は大事なもの、諺にも云ふ通り品行の本獨立  
 の基ですが、それも心の取り様で、百萬圓有つても乞食根性がの  
 む者もありますからねエ。わたしは此時に自分の身代残らず失つた  
 のですが、併し其代りに億萬圓も買ふことの出来ぬ心の悟を授けら  
 れました。

併し悟りは一時に開けるもの、癖はなか／＼手間取るもので、わた

しは今の年になつても少し油断をすると人を羨むだり、自分の身の  
 上に倦きたり、正直にするのは馬鹿な話で、本當は世の中を浮いて  
 暮らすか上分別なのではあるまいかと惑つて見たり、することもな  
 いではありません。ほんに耻かしい次第で、其様な時は何時でも八  
 月十二日の夜の事を思ひ出して、吾れと異見をして居ます。

何ですと、あ、其あとの話ですか。叔父叔母は其後もわたしをわけ  
 て親切にして呉れましたが、二三年前に流行病で前後に果てまして  
 それから従兄の欽一郎はわたしに此様になつて仕舞たのを是非に妻  
 にと望みましてね、わたしも眞實身にしみて嬉しかつたのですけれ  
 ども、少し考へた所もあつて断りまして、唯寫真一枚貰つて置きま

した。其後その従妹いとこは近所に嫁にいつて、従兄も妻子さいしが出来て、叔父の家もすつかり變つてしまひまして、わたしもかねての望通り田舎のぞみどほに参る事になり、それから今までも此様なに皆様の御世話おせわになつて居ます。エ、其の男をとこの人は如何どうなつたつて仰有るの？ さあ、其人は、其人は何か落おちぶれでもして、わたしが其人に邂逅めぐりあつて親切に世話でもしてあげる様なれば、おほ、小説の様でせうけれども、本當の事を云へば、其後はさつぱり便りたよを聞きません。何處かの會社の社長ちやうさんになつて居るかも知れません。従兄の欽一郎は今は陸軍少佐で、東京に居ます。そら此間見せましてせう、裏に龍と鳳凰ほうわうの彫刻のある古風の鏡かみ、ね、錦の囊にはいつた、あの鏡は一昨年田庄臺で

分捕つたものだ云つて欽一郎が送つてよこしたのですよ。

湘  
南  
雜  
筆

家兄官に就かれし頃  
戯によみて送りける

青い雲

白い雲

同じ雲でも、わしや白雲よ

わがまゝ、氣まゝに

空を飛ぶ

元旦

早起、若水を汲むで顔を洗ひ、雑煮を祝ひ終り、櫻山に登りて、富士を望むに、雲に潜むで見へず。

山を下りて、逗子の村を過ぐれば、人家の椿に三四十輪の花あり。椿に隣れる梅樹の槎槎たるに、點々として蝴蝶の羽のかゝれる如きを諦視すれば、梅花の已に發けるなり。

日あたりよき所には、稀に堇花蒲公英の一朶兩朶を見る。

舟にはあの一旗を樹て松を飾りたり。村の子女晴着して羽子をつき、紙鳶を飛ばすなど、淋しきながらも流石に正月なり。(一月一日記)

## 冬 威

雪猶融けず、地は凍り。水は氷り、萬象口を噤みて、始んど生意を見る能はず。

砂山の松を穿ちて、野に出づれば、北風飄々鬢を吹き、ステツキ持つ手龜まむとす。空には凍雲漫々、目の到る所山も野も枯れに枯れぬ。野川の橋を渡る頃、曇りたる空より粉の如き飛雪粉々として降り來しが程なく歇みたり。

「冬」なる哉。雪を帶ぶ茅舎の影寒田に宿れば、田も半ば凍りぬ。林には波の吼ゆるが如き音あり。「冬」の聲なり。残雪を帶ぶる枯蘆

のがさくと鳴る音、乾き果て、枯れ果て、吾魂を爬き破る心地す。

春は終に來らざる乎。

村のはずれには、女あり、雪かき分けて、冬菜を摘めり。村籬には椿紐に、梅花もちらほら咲きぬ。 (二月十日記)



## 霜の朝

手水鉢の氷厚し。外に出づれば、道側に引あげられたる海藻雪の如く霜を帯び、田越川一面に薄氷をつけたるが、潮の満ち来るに従ひ、氷はぱり／＼と音して裂け、裂けたる片は潮につれて上流に流れ行く。

川邊の葭原に下り、凍りたる泥を踏み、霜白き葭を分け行くに、鳴五六羽ばた／＼と起ちて、對岸の葭原に入りぬ。葭原の盡くる所は、農家の裏なり。四ツ手網一つ朝日にかゝりて、紫の紗の如く光れり。網の上に白羽の如く白銀の如くキラ／＼と輝やくものあり。

氷片のかゝれるなり。

日次第に上りて、川の兩岸を鎖せる氷も次第に融け、融くるに従ひて碧空の色、枯葭の色、黄ばめる松の色、四ツ手網の色など次第に流れぬ。海藻を満載せし舟氷を分けて川に溯り來り、岩上の農夫と價を論じて海藻を賣る。此は麥の肥料にするなり。一舟の價三四十錢。

(二月十六日)

## 伊豆の山火

夕に瀧に立てば、半天に火あり、數點、星には紅に過ぎ、漁火には高きに過ぐ。是れ何ぞ。あゝ是れ伊豆の山の焼くるなり。晝見れば、海の彼方に、此處彼處線香の煙の如くほのかに、夜は斯くの如く紅なり。山火乎。山火乎。海の彼方にも人住みて彼火を焚く乎。是れ海の彼方に住む「人」の十里の水を隔て、此方の「人」に生活の消息を傳ふる爲めに焚くの烽火にあらざる乎。(二月二十日)

## 霽日

今日も水晶の如き日和。

川は水蒸氣、道路は鐵、畑はたゞ一面の霜なり。手水鉢の氷砕いて、手を淨めつゝ、後山の方を見れば、「咳嗽の神」の祠の下に、五人の男火を焼きつゝ話せり。碧き煙、山を掠めて、朝日の空に消え行く。

やがて彼等は山に上りて、白茅を刈り始めぬ。ざわ／＼／＼、白茅の山は髪を摘むが如くに上方より剪られ、見る／＼半面禿げたりぬ。束ねられたる枯茅は、一つ／＼落されて、麓に横はる。

朝日満庭、隣家の主婦は襷かきにて井戸端に洗濯し、吾宿の主婦は満面の日を受けて、漬大根の首切りつゝあり。其側に兩家の子供三四人、嬉々として遊ぶ。行人皆挨拶す「今日はち暖かですよ。」

\* \* \* \* \*

午後、潮干で、川口の浅瀬には、女子供青苔を採り、蠣を拾ひつゝあり。川上の葭原には、人ありて籐々葭を蒔れり。

山蔭の田は未だ氷白けれ共、日向は次第に融けて、ぱりくぱりくわれと破れて響を立て居れり。今朝人の火を焚きし「咳嗽の神」の祠に行けば、木瓜の既に荅めるあり。枇杷の花は巳に未になりぬ。

枯松葉、枯笹など夥しく負へる男女、松葉搔を持ちつゝ、山を下り来る。

隣家に薪割る音頻なり。

(二月廿五日)

初 午

初午の太鼓鑿々たり。

梅花は已に六七分、麥は未だ二三寸。

「奉獻稻荷大明神」の旗村々に立ちて、子女衣を更めて往來し、人の振舞酒に酔はざるはなし。(二月一日)

立 春

今日は立春なり。

潮甚く干たり。砂廣く、海狭くして、水低きくなりぬ。

夕方出で、濱に歩す。

日は落日に間もなうして、然も西の空は薄き藍色の靄の覆ふあり。

日は夢の如く靄の中に微黄をぼかす。

潮干、砂廣くあらはれて、燈摺の鼻の岩礁と、鳴鶴が鼻の岩礁と、

黒く海中に延きたり。人あり、長一寸ばかり、岩の上に立つ。帆あり、

潤一分ばかり、點々として遠見の果に遊ぶ。海は溶々として膏

の如く、とろくとして流れず、纒かに砂際に漣を捲きて、緩々砂に融くるのみ。日は茫々としてほのかに海に流れつ。鳴鶴が鼻の影は、鱗皮の如く鱗々として高低せる砂と砂の絶へ間を求めて、狭きに缺け、廣さに圓かに臥したり。空眠り、日眠り、海眠り、山眠り、山の影眠り、帆影眠り、人眠る。立春の夕、地も天も蕩然として融けむとす。  
 (二月四日)

雪の日

起き出で見れば、満天滿地の雪。

午前は粉雪粉々霏々、午後は綿雪片々飄々、終日間断なく降り暮らす。

障子を開けば、玉屑霏々亂れて斜に飛び、後山も雪の爲におぼろなり。風大に到れば、積りし雪また亂れ立つて走る。午後はいよゝゝ降りしきりて、馬車も通はずなりぬ。積る雪の重量に、何の木にやぼさど折るゝ音するもの兩三度。

満天滿地一白の中に、獨り前川のみ鼠色にして黒く、鷗十數羽來り

て洒ぎつるあり。時々其二三羽、水を起つて、十分に翼を擴げ、風雪に向ひて飛ばむとすれど、吹きやられ吹きやられして、空しく水に下りぬ。

盡日霏々濛々、天地雪に埋れ、人風雪に閉ぢられ、斯くて降りながら夜に入りぬ。

夜十時燈を攜りて外を覗へば、飛雪猶紛々たり。

(二月十六日)

雪の明くる日

夜來の風雪止み、今日は玉の如き霽となりぬ。

日高く昇りて雪を蒸し、檐頭の雪先づ解けて、點滴雨の如く落ちて

小川をなし、泡立ちて圓き舟の如く流れ行く。障子閉せば、滴々點

々の影連りに障子を落ちてしばく雨を疑ひ、障子開けばさらく

と光りて靑空より眞珠の降るに似たり。雪に伏したる莢竹桃、少し

融けて壓力の薄らぐと共に、殘雪を刎ね落して起さかへる。

富士は麓まで綿もて包める様にふくよかに、日先づさして嶽頂の水蒸氣煙の如く立上る。相豆の連山は一白にして鮮やかなること驚

く可く、五六里も此方に歩み寄れる様なり。

初春の雨

午前春陰、午後春雨、暖かにして長閑に、且静かなり。

逗子の梅は多く老いぬ。八幡の林には、子を負ひたる老婆、松葉松  
子枯枝を拾ひつゝあり。雨は松杉櫟の間を漏りて、ほとく枯葉虫  
ぢりの砂をうつ。

村より野に出づれば、麥の緑著しく深ふなりて、路邊の枯草も緑  
斑らに萌へ出でぬ。雨をらるにしぶきて神武寺の山碧くかすめり。  
櫻山には猶斑々の雪を見れど、山も樹も家も畑も田も春雨に漏ひて  
優かに見ゆ。川邊の枯葭其處此處に一叢二叢を残して概ね刈られ、

川明らかに圃廣ふなりぬ。四つ手網一とつ春雨にかゝれり。

梅花は香を漬し、椿は紅を流す。麥の緑濕ひて、山の碧煙れり。

此雨や如何に春色を催すらむ。

歸りて富士見橋のほとりに到れば、舟二艘筥を掩ふて浮び、今しも米を洗へるにか、倒にかけたる米かし桶より乳の如き滴々春潮に融けて流る。進潮雨を帯びて碧膏の如し。沖の方濛として春帆一つ雨を穿ち來る。(二月廿三日)

### 初春の山

後山に上る。

春空靄として四山霞棚引き、争はれぬ春となりぬ。

海はゆらくとして空と一りに融け、練れるが如き水の面に富士の

白雪ちらく流れぬ。漁舟鷗よりも小なり。

村々はまだ冬枯のまゝなれど、霞低ふ地に這ひ、春四に満てり。鳶

一羽悠々として山下に舞ふ

山崖、畑の畔、到る處落の臺青く萌え、榛の木などは已に垂々の花をつけ、春蘭も早きは花ささぬ。枯草枯葉の間より春は簇々として



萌えつゝあり。 (二月廿八日)

三月節句

陽曆の節句、桃は咲ねど、春雲日を籠めて、空氣は酒よりも濃やか  
なり。

逗子の村を過ぐれば、梅花も白きは已に過ぎむとし、椿は花葉より  
も多く、ぼてくと早落ち初めぬ。綿弓鳴り、鶏鳴き、悠々とし  
て春村に満つ。

田の水もやゝ温みて、雑草青み、七色の脂浮める土の水を吸ひ水を  
吐く音びちくと、土も復活の満足を唸やくに似たり。  
麥緑ますく濃やかに、菜の花も咲き初め、田の畔の野茨も簇々芽

を吐きぬ。

昨日の暖雨に、箱根足柄雪融けて、富士も麓而上四合あたりまで白衣を脱ぎぬ。(三月三日)

春の海

不動堂に腰かけて海を眺む。

春の海溶々として漾々たり。或所は大なる蝸牛の這ひたる跡の様に滑りて白く光り、或所は億萬の鱗族ざわめく様に青く顫へり。磯近き水は透明にして明礬色を帯び、圓き石個々紫の蔭を持して水中に横はり、茶褐色の藻は梳りたる髪かみの如く磯岩を纏ふ。波と云ふ程の波はなく、唯揺々たる海のスウエルは、衣の皺をも熨す様に、一つづゝずうと押寄せ來りて磯に碎け、岩の凹窪に入りてはたふりと響き、小石に散りてはざあと囁めく。

見突みつきの舟ふねあり。時々ときどき棹さしを舟ふねの上うへに落おす音ねかたりと響ひびきぬ。鮪たこ鰕えびな  
ど突つく男おとこあり。ざぶく浅水あさみづを涉わたりて、足下あしもとより鱗うろこ々の銀ぎんを踏ふみ出  
す。(三月十三日)

彼 岸

今日けふ彼岸ひがんに入る。

梅花れいげ歴亂れきらんとして、麥むぎ緑りよく已いに莖けいをなしぬ。菜花さいか盛さかとなり、椿つばきはぼたり  
ぼたり落おち落おちて地ちも紅くれなひなり。

野のに出でづれば、田のの畔ほとりは土筆つくし、芹せり、薺なづな、嫁菜よめな、野蒜のびる、蓬よもぎなど簇ぞくぞく  
として足あしを容いる可いき所ところもなし。臺たいは花はなとなりて、蔭かげも小ちいさき青傘せいさんを  
翳かざし初はじめぬ。其その蔭かげに含は差さめる堇菜花すみかの何なんぞ美うつくしき。蒲公英たんぽぽは小ちいさき  
日ひをば惜おし気けもなく田のの畔ほとりに撒まき散ちらせり。木瓜ぼけも紅唇かうしんを開ひらきぬ。  
田川たがわの水みづの音ねを聞きけ。溶やう々くとして滑なめらかに、其その裡うちに無む限げんの春はるあり。

おたまじやくし初めて生れて五分ばかり、温き水に泳げり。農夫は  
已に田をかへし初めむとす。

川邊には、枯葉舊根の間より、茅花には大に筍には小き蘆芽の數  
限もなく茜色に吐き出でぬ。

野には雲雀を聞き、吾隣家の樺には、近來日毎に鶯來鳴けり。

(三月十八日)

伊勢參宮

書窓の外、馬の鈴音ちやらくと賑やかなる笑聲の聞ゆるに、何ぞ  
と覗けば、赤白紫さまざまのきれを飾れる馬三四疋、乗れる男は  
旅装にて、大勢の男女老幼之を取巻き、囃し立て、停車場の方へと  
行くなり。伊勢參宮の首途を祝すなりとぞ。  
戯れに斯るものを作りぬ。

伊勢參り

一、麥はのびたり、まだ粃やまあかぬ、  
桃や菜種の花ざかり。

二、お伊勢参りの時節はいーまよ。

五十三次ぐ、十日はむかし、

今は一日、汽車の旅。

三、古いしやつぽを、横ちよにかあぶり、

赤い毛布に、股引やねーるよ、

馬の鈴音、勇ましや。

四、「おや太郎作さん、もう御立ちかへ？」

「誰かと思ひやお松どん、ちよと行って来ましよ、土産は何か望まつせへ」

五、「おほ、土産はいらぬが、聞かんせや、

伊勢の松坂、女郎衆の名所、

迷はしやんすな、戻らんせ。

さッ〜〜と戻らんせ。」

六、「おは、おは、おは、おは、」

馬の鈴音しやん〜〜と、やがて霞に消へて行く。

(三月廿五日)

## 磯、の潮干

家も建つ可き平磐の今日は水を出で、日光に見へ、岩に附着せる海草の日に照らされて、びちちと何か言ふ様なるもおかし、岩の裂け目には、退きわすれし潮水湛へて日に温み、名もなき小魚多く遊べり。岩より岩に飛びて。磯の盡端に行けば、此處は潭深うして然も水は緑玉の色に澄み、かぢめ、もく、みるなどさま／＼の海草波のうねるまゝに揺々と靡き、日光の金糸を落して水底に綾を織れるも美しく、ベラ、カサゴ、トラハゼ、カワハギなど磯魚の岩を出で藻に隠れて、往來するあれば、紅の海松、朱色のヒトデ、紫色の

ガゼ、緑色のイソキンチャク、茶色の雨虎など動植物の分界怪しさもの共の此處其處に水を彩どりて、水中の春は陸上の春よりも却つて美はし。

潮の香を嗅ぎて、岩の上より眺むれば、鹿菜、コブノリ、カマド、トコブシ、蝶螺、イソモチ、タマ、ガゼ、ヨコガイ、シリダカなどを刈り剥ぎ拾ふ女點々として岩に散り、間々麗衣の子女とまじりて、磯も宛ながら花さける様なり。章魚突く男は、水澄ます油入れたる竹筒片手に、片手は手頃のホコをとつて、岩より岩に飛べば、見突きの舟は巧みに岩と岩の間を縫ふて、漁夫か覗桶に顔さし入れ水底を覗きつゝ、水手と言ふ聲ほのかに聞ゆ。海は岩の彼方に帯より

も窄く、忽ち深碧天と際だち、忽ち白く光りて、空と一ならむとす。春帆二三、遠く伊豆の山を掠めて行く。磐岩と地かたの間には、一泓の潮湛へて池をなし、山影緑を浸す。漁家の子女五六人、小さき帆船を作りて之を浮ぶ。微風起りて帆張り、彼岸に達すれば、子供等手を拍つて喜ぶ。風止みて、舟中流に滞れば、子供等石を投じて之を追ふ。啞なる子の、年は少しまさりたるが、其中に立まちりて、吾放ちたる舟の首尾よく彼岸に着きしを、他の子供の袖曳きて指し示しつゝ、嘻々と笑へるも、あはれなり。(四月二日)

### 沙濱の潮干

金澤の牡丹見に行きて、歸るさ、野島に遊びて見るに、野島より夏鳥まで直徑半里ばかりの砂濱は、夥しき具堀り人に満たされぬ。皆此あたりの農婦蟹女にて、此砂濱は實に彼等が衣食の田なり。老婆より五六才の女兒まで、皆かぶり、手拭、赤襷、跣足と云ふ出立ち右に裁庖丁の如きものを逆手にとりて砂を鋤き返へし、左手ははしこく掘りかへしたる具を拾ひ行く。或は一尺あまりの竹箸の尖に鍼力の鋒つけたるを砂に穿てる小穴につきさして、馬刀具を引き上ぐるもあり。獲物は鹽吹貝、蜆、尤も多く、蛤、螺、馬刀、ばか、な

ど之につぎ、間々わたり蟹、童蝦などの砂にもぐれるあり。鹽吹具は名の如く、堀りて取らんとすれば、忽ちふつと水吐くさま人を嘲りて睡さする様にて、面憎し。馬刀は穴を見て初刺に刺されば、遁竄して行く處を知らず。蝦は退潮に逃げ後れて、砂にもぐり、窟強の隱家と思へるが、堀りかへされて阿容々々と捕虜になる、宛ながら平治の信西も思はれて笑止なり。

見渡せば、砂は恰も一大盤をなし、其の周圍には碧海宛がら帶の如く盤を繞り、碧色の遠山また條の如く海を限る。盤上は薄紫の砂にして、處々の殘溜淺うして踵をぬらさず、小蟹走り、小鯨遊ぎ、何處にもぶち〜鳴る音す。蟹の言ふにや、沙の日と囁やくにや。静

かに見れば、此一大砂盤の上に、具堀る人は蟻の散れるが如く、點々として俯き、俛し、屈みつゝ、蟹の如く砂を堀かへせば、紫の砂は簾々として黒く覆へり行く。或は歌ひ、或者は黙し、遠きは呼び、近きは語り、時々或者立ちて腰伸せば、其頭は砂盤を越へて、帶の如き海を越へて、白雲ゆく空につかへぬ。

長閑なる哉、海遠うして細く、帆いよ〜細く、山遠うして碧く、雲ありていよ〜碧し。數百の兒女老幼砂に群がりて、おのかじ、砂を掘りては貝をおさめ、いそ〜としていそしめば、手桶と籠と器とは其處此處に散點し、山影は砂上の溜に臥し、すべて悠々として春光の中にある。



已にして潮次第に満ちむとするにや、或はふごを荷へ、或は熊手を肩にし、ざるを背負ひ、手桶を提げて、歸る者續々「まだお取りなさんすかい」など呼ぶもあれば、「あぶねエよ、潮が満ちて来るだ」など小供を戒むる聲も聞ゆ。後れて來れるは、猶踏どまりて、汲々たり。

已にして潮は砂盤の四方より包圍攻撃を始め、帯の如くなりし海は四方より一分づゝ、次第に廣まりて初め砂盤の中央に掘り居し者も汐先に足をあらはれ、次第に一人づゝ陸へ陸へと驅りやられて、砂退り人退き潮進み海進みて、薄紫の盤は見る／＼縮まり、一時間ばかりして見れば、砂場痕なく、海は吾足下まで漫々と白く湛へ、

帆影悠々として所得貌に浮めり。

(四月一日)

## 花月の夜

戸を明くれば、十六日の月櫻の梢に在り。空色淡くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和らかなり。春星影よりも微に空に綴る。微茫月色、花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎なる一枝は月にさし出で、ほの白く、風情言ひ盡く難し。薄き影と、薄き光は、落花點々たる庭に落ちて、地を歩す、宛ながら天を歩むの感あり。

濱の方を望めば、砂洲茫々として白し。何處やらに俚歌を唱ふ聲あり。

又

已にして雨はらくと降り來ぬ。やがてまた止みぬ。

春雲月を籠めて、夜ほの白く、櫻花澹として無からむとす。蛙の聲

いと静かなり。(四月十五日)

## 新樹

夜來の膏兩止み、九時頃には滿天の雲散り且薄れ且細りて、綿の如きもの紗となり、紗の如きもの煙となり、煙の如きもの終に全く消へ、一碧玉の如き空となりぬ。

日光雨の如く射し來りて、障子に若葉の影さしぬ。

其影の多きを見て若葉の茂れるを知る。

静かに觀れば、一庭の新樹日を受けて日を透し、金縁色に榮へて、宛ながら一天の日光を庭中に集めたるの感あり。其の枝々葉々上には水の如き碧の空に映り、地にはあの〜紫の影を落せるを見よ。

櫻は葉となりたれど、猶稀に一點二點の殘花を葉がくれにとゞめ、時々蝶の飛ぶが如くひらく〜と舞ひ落つ。木の下に落花と紅萼と點々として影と共に地に貼せり。白き鶏一羽、身に斑々たる若葉の影を帯びつゝ、落花を啄む。

枝と枝との間に、かけ渡したる蛛糸の、碧に黄に、紅に閃めくを見よ。限りなき飛虫の雪の如く紛々として樹を繞り、蜂蛇の咄々として日光に飛ぶを見よ。自然は此麗日に際して、十分の満足を表し居るなり。

獨り蝴蝶の往く春を追ふて忙しげなる、夢と知らで花にあこがるゝかとははれなり。

風徐ろに吹き來ぬ。新樹は徐ろに碧空を撫で、領さ、滿地の樹影も、  
た靜かに顫ひ、新樹より新樹にかけ渡したる洗濯物の影は翻々とし  
て地上に躍りつゝあり。

落木に近かりし隣家は新樹に遠くなりぬ。塙を隔て、機聲咿啞。

又

日落ちぬ。樺色の雲あり、高く新樹の梢にかゝりぬ。

夕風そよ吹きて、新樹空にそよぎ、麥圃も靜かに波うちつゝあり。

蒼々として日、夕に向ふ。顧れば後山の松の上に、十四日の月盆の  
如く、未だ光なくしてかゝれり。畑を歩すれば、豆葉豆花の香衣  
を襲ふ。

空も空氣も風も月もすべて水の如く淡く、水の如く清く、水の如く  
流る。  
(四月廿日)

## 暮春の野

青葉茂りて、村々緑に埋れ、蘆暢びて川狭ふなりぬ。

川の上流に立ちて、村の彼方に沈む日を見る。日は已に小坪の山にかゝりて、山は青黒き村の梢に絶々の紫を見せたり。潮次第に満ちて、川逆まに流れ、一川の泡、雪の浮める如く、青蘆の影を掠めて溯り行く。彼方の岸に四つ手網あり。人は青蘆に隠れて見へねど、其四ツ手を引上ぐる毎に、網は夕日を帯びて紫金色に閃めき、玉の如き水たらりと川に滴る。

やがて日は紅の球を揺かして山に落らぬ。残照林端の空を紅に

抹し、水にも其色流れつ。潮はいよ／＼川に満ち、残照を浮べ、青蘆の影を載せ、白き泡を運び、紺色の林影を浸して、漫々としてまさに小板橋を浸さむとす。時々魚あり林影の中にはねて、紺青の水に白き渦紋を湧かしぬ。

夕風そよ吹き、残照の影も次第に薄うなりぬ。蘆は影と一つになり、そよ／＼歌ひながら暮れ行く。何處の寺の鐘か杳々として野末を渡る。

やがて地は青黒う暮れ、人家の障子に燈火紅に見え初めぬ。

(五月十日)

蒼々茫茫の夕

静かなるは麥荳濟む頃の田舎の夕暮なりけり。  
 神武寺に遊び、夕に及びて獨り田間の路を辿りて歸る。日は蒼然たる暮雲に包まれて落ち、雲のされ目に一抹朱をばかせし殘照も消へぬ。此處其處の畑より、村より、山側より、麥藁焼く煙縷々として立上り、蓬々として廣がり、果ては山も村も茫茫となりぬ。  
 静かに立ちて眺むれば、暮雲暮山の影落ちて水闌らさ田の面に、白きもの湧き出で、見る／＼田より田に蔓延り行く。麥藁焼く煙の影の田を渡るなりけり。其底に蛙聲あり。

日落ち、煙満ち、物は物と互に融け、恍として無我の境に入る。人語なく、物音なく、燈影なし。唯蒼々たり、茫茫たり。  
 静かなる夕や。  
 獨り黄昏の底に立ちて、耳傾くれば、蛙聲獨り闇々、また蟻々。  
 是れ實に「夕」の聲なり。  
 (六月七日)

## 夕山の百合

夕方後山に登る。夕風青茅を戦がして、百合の花の香其處はかとな  
く漂ひ、丘上にしよんぼり月の影あり。日は大山の右に入りて、  
残曠猶明らかに、金樺色の横雲ありて、宛ながら彩旛の翻れる如く、  
西より北に横たふ。富士は薄き藍色の暮雲を抽ぎてほのかに其頂を  
露はし、海は紫を流して、一帆徐ろに其面を移り行く。

村の方を望めば、此頃まで村と村との間に照り渡りし麥は何時か蒔  
られて、其あと黒く、田は半植ゑられて、緑ほのかなる新秧の田と、  
水のみ白き未挿の田と入り亂れ、一條の川帯の如く其中を廻りて白

く光りぬ。麥蒔られて、緑樹の村いよ／＼闇らし。其處にも、此處  
にも、麥わら焼く煙立ちのぼる。ふち／＼音するは、稈の焼くるな  
り。煙の本に紅の火閃めくは、風ありて煽れるなり。見る／＼煙は  
村を包み、山を侵して、黄昏は其中より湧きぬ。蛙聲風にのりて聞  
ふ。

暮れて、山を下れば、徑を夾む青茅の一色に青黒さに、點々たる  
百合の花、朧夜の星の如く、ほの白う暮れ残りぬ。風そよ／＼とし  
て、夕山の香袂に満つ。

山の端に月光り初めぬ。

(六月十三日)

## 梅雨の頃

雨降りて止み、止みて又降る。鴉聲と蛙聲と交々雨晴を争ふ。

雨の絶間に出で、麥藁まぢりの深泥を踏みつ、村を過ぐれば、

緑くらす家には人ありて梅子を落し、畑には甘藷を植ゆる女あり。

田は大方植ゑられぬ。嫩黄田々、秧猶疎にして水多く、蛙聲四に満

つ。田より田に落つ水は、音も濁りて、こぼくと鳴る。まさに、

梅雨の頃は水の聲なり。

川は膏の如き碧潮満々として、黄なる麥藁一束浮き沈みつ、漂ひぬ。

川邊の蘆稀に穂を抽きたり。其蘆を折り敷いて、鰻鮎を釣る子供あり。

り。

氣重ふして濃やかなり。村より出づる煙の濕ふて立ちも上らず、

靄となりて這へるを見よ。山の藍深く緑重ふして、滴水を落さば色

融けて流れむするさまを見よ。

山に梟の聲あり。

雨はらくとまた降り出でぬ。

(六月十八日)



## 夏

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子開き、簾を下ろして坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。

富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すがしく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。青疊敷く相模灘の上を習々として渡り來る風の涼しさを聞かずや。

## 又

今日初めて鯛の聲を後山に聞きぬ。一聲さやかにして銀鈴を振れる如し。

白日山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり。談笑の聲あり。笛聲あり。花火を揚ぐる子供あり。夏の季は始まりぬ。(七月十日)

## 涼しき夕

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ、釣る。前に残照流る、川あり。後に青蘆さやくと戦げり。

潮次第に満ち、川逆まに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底地よりも鮮やかなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのカイヅは隊をなして水色の玉にも似たる水を游げば、其影ちらちらと底に印せり。石垣の穴より出で遊ぶダボ鯨は、鰲をあげて迫り依る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰻は杭を抱きて這ひ登り、石垣に絶れる宿かりは身を投ぐる様にころりと水底に墜ち行く。

下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より涼風と共に流れ来る。潮満ち盛れば、「夕陽明滅亂流中」、残照の影や、もすれば押流されむとし、小鮮群がりて水を攪すれば、水流れて其紋を消し、幾々たる川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出でむとすれば、幾隊の魚苗もとまりかねて流れ行く。垂れたる足の爪先に水とく頃は、残照消へ、潮も満ちて淀みぬ。鯿跳つてまた水に落つる音、石を投ぐる様なり。

(七月廿日)

立 秋

秋、今日立つ。

芙蓉咲き、法師蟬鳴く。赫々として日熱するも。秋思已に天地に入りぬ。  
(八月八日)

迎 火

今日は八月十三日、此邊は陽曆より一月おくれに年中行事をすれば、今日は盆の初なり。

日落ちて、夕風夕潮と共に生じ、川口に泊れる和船の檣の邊りに入日の月銀の如き缺壁を掛けぬ。

吾宿の老婆一束の藁を川邊に持ち出で、中に杉葉を入れ、まつちを摺りて火を點じぬれば、藁は炎々として燃へ立ちぬ。老婆鉢に入れし水を、手もてふり澆ぎ、茄子の賽の目に切りたるを火に投げかけ、合掌して

「お爺さんも、孫も、此火にのつて御出なさい……さあ……家に御はいりなさい」

と云へば、二年前に母を喪ひ父を失へる五歳の童も、小さき掌を合はして火を拜みぬ。

川邊には、其處此處に火燃ふ。其一つに行きて見れば、八十餘の老婆線香をとり、熟々と燃ゆる火を眺めてありき。此老婆は昨年老夫を喪へる者なり。

各所の火はとろくと燃えて、やがて灰となりぬ。夕潮石垣を拍ちてたふく声あり。言はねども月も空より此世を眺め貌なり。死者知るなき乎。夕風の「否」と囁やく聲を聞かず耶。(八月十三日)

### 舟を川に浮ぶ

舟を浮べて、御最期川を溯る。

日落ちて、残照水にあり。山には蟬の音、蜩の音猶流れぬ。

舟は暮色と共に次第に川を溯る。夕潮満々と湛へて、青蘆の洲も半水にあり。舟行く方は、山影碧く水に臥し、時々鯿あり、高く跳ねて白き紋を畫く。

日暮れて、水白く、兩岸黒し。鈴虫、松虫、きりくす、水を挾みて鳴き、山の闇さには梟咽を鳴らす。空に五位鷺の聲あり。

(八月廿日)

夏去り秋來る

女郎花咲き、柿の實ほのかに黄ばみ、甘藷次第に甘し。つくつくは  
うしは晝に、松虫鈴虫は夜に、共に秋を語る。粟、稻、蘆穂のさわ  
くくと云ふ音を聞け。

微雨はらく降りて止みぬ。是れ今年の夏の季を送るの聲なり。

(八月廿八日)

秋分

今日は秋分なり。

朝起外に出づれば、白露地に満つ。稻穂、粟穂、薄花、蘆花すべて  
露の中にある。虫聲水の如く流る。

又

彼岸の中日なれば、近在の老幼男女藤澤に鎌倉に寺詣りして歸る者、  
織るが如し。川邊には鯨を釣る者、多く並べり。

午後の日悠々として、碧湖川に満ち、行人路に満ち、日光空に満ち、  
百舌鳥の聲耳に満ち、風なく氣清ふして、秋心に満つ。

又

日入りぬ。無花菓の葉蔭薄闇くなりて、芙蓉の花も夕と共に凋まむ  
とす。空に雁聲あり。

十五夜の雨に隠れし月は、今宵照り出でぬ。庭の眞砂何時しか霜置  
ける様に白らみ、樹影黒く地に湧きぬ。

庭の白萩月に照りて、雪の如し。 (九月廿三日)

鱒釣り

(上)

「阿叔、釣に行らッしやらないの？」

恰も日曜の、午餐を喫つて居る所へ、外面の簾を掲げて、近所の小  
娘が案内に來た。斯娘の爺々なるものは、東京者だが、久しく逗子  
に居て、手舟一艘もつて、時々沖釣に出る男だ。

二つ返事で、からり箸を投げて、道具と魚籃と敷物を、小脇にかゝ  
へて、前川へ下りて見ると、舟の用意は出來て、舟主——甲某と云

つて置かう——は徐々纜を解いて居る。今一人單衣の上に巡査の古外套を被つて爺は、或茶店の主人で、是も釣好家の乙某だ。川口を出て、灣内を十二三町斜めに横切つて行くと、最早鱒場だ。此處らは纜五六尋しか立たないが、底が巖で、藻が生へて、其れで鱒の寄る場所の一となつて居る。此處な場所が、此近傍では數ふる程しかない。其處を外れると、一日釣つても恐らく目的の魚は一尾も獲られないのである。櫓柄を握つた甲某は頻りに山を見ては考へて居たが、頓て領いて錨を下ろした。漁師はすべて山の谷間とか、木どか家どかを見當にして、漁場を覺へて居る。で若し何の邊で鱒が釣れるかと漁師に問へば、彼等は山上の松を指して「彼の、それ、

大い松があるね、彼を左左（若くは右右）ととつて御出なさいしなど教ふるのである。

鱒釣りの時候は、九、十、十一月が盛りと云つて宜い。今頃では、よく釣れる當歳のが先四五寸、尤も中にはまる鱒、め鱒の二才三才と上つて尺も其上もあるのがかゝる。併し鱒はあたりが軟で、殊に口の薄脆いもので、手荒に引いたり糸が撓むたりすれば、直ぐ頤がきれて逃げるものだ。鉤は鱒釣位のもの、餌は多く白子、または鱒其ものを細かく切つて、同餌に用ふることもある。時間は大抵朝夕、水は成る可く濁るのが宜いのは、何の魚も異はないのだ。一艘の小舟の三箇所に陣取つて、三人各々糸を下ろして見たが、未だ

時間が早い故が、水が澄むだ故か、ペラなどの磯魚が二三尾釣れたのみで、鱈のあの字もかゝらない。某甲は水中眼鏡で、海底を覗いて「黒鯛が来た、黒鯛が来た」と忙しく鯉を刻むで湯煮た薩摩芋に摺り雑せ、之を餌にして糸を下ろして見たが、更にあたらぬ。黒鯛は實に意地のきたない魚で、小鰈、糸目、小蟹、牛肉、薩摩芋、乃至上地地方でよくする鯉と味噌と餛飩粉の練りませ、何によらず貪つてはかゝるものだが、今日は水澄むで、殊に碧玉其まゝの水を射透す日光の明らかなるが、彼等の眼を鮮やかならしめたと見へて、水中眼鏡で覗くと、五六尾の背の黒い魚等が如何にも欲し氣に餌の周圍を繞り／＼して居るが、終にかゝらなかつた。欠伸が鱸の方に

聞へて、某甲先づ鈴のついた針金を舷側に挿し、糸を引かけ（魚がひけば鈴が鳴る趣構だ）煙草を燻かし始めると、乙某も欠伸して、古びた革の煙草入を取り出した。自分も背伸して、恍然と眼を閉ぢ、又眼を開いて海原を眺める。

最早三時過ぎでもあらふか、日は西に廻つて、海の上に白金の柱が横はつて来た。良い時候だ、陸の方から北風が冷やり／＼海面を撫で、舟底を敲く程の細波を立て、居る。鱗形の雲が天心から東南の方にかけて宛ながら白銀の波を大空の碧にうたして居ると、海は其影を浮べて漾々と揺めいて居る。富士江の鳥足柄箱根眞鶴が岬から伊豆の天城山は、西日の光にはつかりと際立ち、左手の方を見る



と近くて葉山遠くて三崎、三浦半島は縦に短く走つて、天城と三崎の中程には伊豆の大島がほのかに見へる。白帆が其處此處に五つ六つ。大島の方角に、ペン尖でうつたの如く一の如く小さいのは、鯉を釣る舟であらふ。名島の方で鱒突く舟の棹が時々針程に空を突いて閃めくと、つい一丁ばかり離れて長い竿で針魚を釣つて居る舟が見へる。それ竿を上げた、針魚が閃らりと光つて舟に跳び込む。何處何處から湧いて来たのか、笹の一葉に黒蟻二つ載せた様なものが見へる。舟だ。黒蟻と見たのは。水夫二人で切々と漕いで居るのだ。其黒い姿が、櫓を押す拍子に、交叉へてはXとなり、離れてHの字となつて、組むづぼぐれつ次第に大きくなつて来る。

秋だ。秋だ。實に秋だ、つい背後の逗子の山々も、心からか少し蒼色になつた様だ。不動様の邊りに頻りに百舌鳥の鳴くのが聞へる。葉山から逗子の停車場に通ふがた馬車の喇叭の音が聞へる。獵銃が無いと見くびつたものか、つい四五間側へ鷗が一羽下りて、時々水に潜つては鯉を啜へて出で、人間は不器用なものだ」とさも嘲り顔に、此方を向いて、胸をつき出して、ゆら／＼波に浮いて居る。

## (下)

其様する内に、笹の一葉と見へた舟は漸次に近く漕いで来て、吾々

の舟から三四十間離れて、碇を下ろして釣り始めた。針魚を釣つて居た舟も一艘、其側に寄つて來た。吾々も碇を上げて、舟を其方角に移した。

「如何だね、爺さん、些とは鯨のかたがあるかい？」

一艘の漁師は答へた「左様だね、纒二三尾誑しましたアよ」

二三尾、さあ氣をつけろ、と争ふて糸を下ろして今や手ごたへがあるかと待つて居ると、二十間ばかり向ふの波の上を突然にびんくつゞけさまに飛んで行くものがある。

「梭魚かね？」と某甲が尋ねると、

「なあに、車轆ですよ、鱸に追はれたんだね」と答ふる言葉の下か

ら、一艘の舟は手早く碇をぬいて、手早く櫓を押して、手早く竿を取り出して、頻りに鱸を所謂だましにかゝつたが、思はしくないと見へて、また漕ぎ戻して、鯨釣りにかゝつた。

釣瓶落しと云ふ秋の日は、箱根の駒が嶽の上に着ちかゝつて、富士の頭は早や紫に染まつて來た。風は悉皆風いで、落日の影漾々と水の上に金を流して居る。百舌も鳴き已むで、陸の方に啞々と鳥の聲が聞え初めた。實に静かな秋の夕だ。空高く海渺々として風なく波なく、夕日の光獨り此間に満ち満ちて居る。

忽ち珂々！ 甲某が糸をかけて置いた針金の鈴が一つ鳴つたかと思ふと珂々琳々と二三の四つつゞけさまに鳴つた。來たな！ 繰り上

げる糸の末を見ると、果然驚茶の背に、銀色の腹をした、眼の大き  
 きな、口の透き通つた五寸位のやつが、潑刺と上つて来た。と見る  
 内に、自分の指先にかけた糸がびくり。しめた。糸を手繰ると、重  
 い。大きいぞ。それ上つた。まる鱈だ。一尺はたつぷりあらふ。  
 さあ釣れ出した。三艘の舟三の字に並んで、餌をつける、投込む、  
 手繰る。所謂膚挑まず、眼逃かず、枚を啣むと云ふ格で、早や蔭深  
 くなり行く水の上のびか、つて、繰り下ろし、引き上げる。隣の  
 舟でドブんと鉛錘を投込む音、此方の舟で手繰る糸の舷側に軋る音、  
 釣り上げられた魚のばた、舟板の上にはねては生簀の水に潑込む  
 音。

「いや此奴ア大きい。ちよ、ちよ、一寸、其た、撫網を」と甲某が  
 遠しく叫むだ。

撥い上げて見ると、何だ、目張の大きいやつだ。

「畜生め、到頭か、りやがつたな」と乙某が胴の間で獨語するのを  
 顧ると、黒鯛を釣り上げて居る。黒釣先生、先刻までは餌を遶つて  
 敢て茹はなかつたか、終に夕蔭になつて眼がくらむだと見へる。  
 破れた沈黙はまたもとに復へつて、また暫らく釣つて居ると、大方  
 葉山の寺で撞き出したのであらふ、暮の鐘が一つポーンと海面に響  
 いて来た。

「如何です、最早終いましやうかね」と甲某は空を仰いだ。

「左様ですな」と鑿き足らぬ溜息一つ。眼を上げると、何時の間にか、日は入つて、富士から相豆の連山は、入り日のあとの卵色の空に印度藍の波をうねらして、未だ瞭然と輪廓を見せて居るが、ついで其處の葉山逗子の山々は已に夕靄がかゝつた。手を洗ふ潮水は宛ながら温湯だ。併し海氣は冷へて、乙某は古外套の襟を立てた。大島は最早見へない。鯉舟の歸るのであらふ、舟は見へぬが、「エツシヨ、く、く」艦拍子が遙に聞へる。

他の二艘も碇をあげて、一艘は小坪へ、一艘は新宿へ歸つて行く。吾々も道具を收めて、富士に目送られて、紫流す水を徐々に分けて行く。最早暮れた。海の上は未だ明るいが、行く方は、濱も松林も

人家も夕炊の煙も山も茫とした一の色に融け合つて、唯臙々として居る。櫓聲の絶間を、三聲四聲高く雁が鳴いて通つた。

川口近くなつて、山の影に入ると、驚いた鯿が跳ねては、眞黒い水に白く環を畫く。火光がちらちら見へ出した。何處やらに犬の吠ゆるのが聞へる。川口の淺瀬の退潮に棹して、舟を乗り入れると、岸の上に白いものが立つて居て、

「爺々ですか」

と幼い聲で呼むだ。先刻案内に來た小娘である。彼女の母なるものも、立つて居る。

「提燈を持つて來な」と呼ながら甲某は舟を繫いで、提燈の光に、

生簀の魚を攪網で撈つて、三の魚籃に移した。釣れる時間が短かつたのだが、其れでも七八十はあらふ。皆潑刺として跳つて居る。

「左様なら。御疲れでしたらう」

道具と敷物と其れから重くなつた魚籃を提げて、ふり顧つて見ると、眞黒い鳴鶴が岬の右手に、今日釣つた海は未だほのかに一道の白を展べて、富士もぼいやりと見へる。富士の上には、明星が一つ、薄紫の空に見めいて居る。

(十月三日)

## 海と合戦

(一)

幸か、不幸か、未だ一度も銃を取つて、敵兵進撃の衝に當つたことはないが、今度初めて海と合戦をして見た。

軍物語をするには、先づ戦場の地形から説明せねばならぬ。相模灘は正南に開いて、太平洋の水を吞吐して居る。逗子灣は灘の東北隅に在つて、西南に口を開いて相模灘を吞吐して居る。田越川はまた南西に向つて逗子灣の水を吞吐して居る。此川口に川を挟んで人家か約二十軒ばかりもある。自分の僑居は東岸にあつて、家の前を、

川に沿ふて三崎往還が走つて、往還から一段高く右に母屋あり、左に小竹藪があり、此間が前庭になり、藤棚があつて、それから五六間退つて、猶一段高く自分等の寓所が立つて居る。中言だが、此小竹藪は、決して取り除いてはならぬと、今の家主の祖父の時代から言ひ置いてあるそうだ。

五日以來の雨に、田越川の水は浮き上る様に増して來た、船は大抵六日の暮方に、一艘も残らず、或は陸に引上げ、或は水上遠く逃げてしまつた。七日の朝、満潮の頃は、やゝもすると、水はちよろしく三崎往還に上つて、皇太子殿下沼津行啓の前には、土木掛が人夫を指揮して、頻りに此處其處杭をうつたり、砂利を填めたり、板

を渡したりするのを見かけた。正午頃になつて、雨が少し止むと、それは蒸暑い、怪しい、胸惡な空氣が家を包んで、障子を明けると、蒸風呂の湯氣の様なやつがぼやり／＼顔に當つて、座右にある書棚の玻璃戸が見る／＼汗かいた。外に出て見ると、空も海も川もひた濁りに濁つて、今にも何か出て來そうである。近所の者も頻りに空を見て居る。忙々ど戸締をする者もある。老龍庵此は家嚴の隠栖で、半丁ばかり川上になつて、殊に小高くなつて居るので、水の心配はないのだに走せつけて、戸の門を下ろしたり、心張棒をしたり、風の用意をして、僭歸つて見ると、頓て吹き出した。南風だ。雨も降り出した。僅かに開いた雨戸の隙から鐵砲玉とたばしる雨の障子

に向つて、書を読むで居ると、風浪風雨の聲屋を繞つて、宛として  
孤舟に座するの思がある。

約二時頃でもあつたらうか、母屋の方から子供が三四人どろどろと逃  
げて来た、前庭に罵り騒ぐ家主の聲が聞える。突と起つて戸を開け  
て、はッ——と思つた、海は吾妻脱石の下まで来て居る。庭一面の  
水の中に立つて、家主は娘と血眼になつて、防波の丸太を横へて居  
る。

「加勢が来たぞ」

一聲叫んで、尻引からげて、飛んで下りると、波は陸を残して颯と  
引いた。恐ろしい力だ。道路の石垣の上押へにした長三尺位の切

石を宛ながら毬なんど遊ぶ様に、ころ／＼轉ばして行く。

「さあ、今だ！」

降る、吹く、其間を、自分はユリゴリの「渡海難」の主人公ギリアツ  
トが孤島の暴風雨の最中に防浪材を組立つる一節を思ひ浮べなが  
ら、防波の製造にかゝつた。宛ながら弾丸の面に立つて胸壁を築く  
のである、左手の方は竹藪が屈強の堡壘となつて居る、虞る可きは  
此竹藪から母屋までの正面だ。有丈の杉丸太を運び束ねる。藤棚の  
大抗に結つける。伊豆石の三十貫目もあらふと云ふやつを家主と二  
人で轉がして、根じめにする。未だ手薄だ。不圖往還に算を亂して  
轉がつた切石を目につけて逸早く飛んで行く拍子に、

「來ますせ、來ますせ、旦那」

遽しく呼ぶ家主が聲を聞き、やつと轉がして來た切石を防材に立かけて、飛びのくより早く、後追かけて來た一道の顔を多きな波が、づづづと川を逆押に押し、一簇り往還に來たかを見ると、出來かゝつた防材を「何の此しき」と云はむばかりに跳り越へて、汜濫と庭一面に散つた。のみならず、一派の浪は斜めに防材を掠めて、撞と一とつ母屋の雨戸に衝ると、雨戸と一枚向ふさまに押し倒して、其隙から滔々と流れ入つた。跣足になつて必死と道具を奥へ運で居た主婦の聲として、「まあ如何せう？何もかも水になつちやつたよウ」

## (二)

左なきだに三日降り續いた雨に、川水は漫々として岸に及むで居る。加之此進潮、更に此暴風。風は海を驅り、海は風を挟み、一灘の水を一灣に、一灣の水を一川に、一川の水を擧げて河口の三二十家に迫るのであるから、堪られぬ。恰も好し、山手に寄つた家の若い者が五六人、駈けつけて來た。屈強な手脚が浪の間々を潜つては、切石の石塔大なのを十四五も抱いて來て、丸太の上に並べ、猶其上を大丸太で押へて、荒繩で蜘蛛にからげた。母屋の雨戸は裏表から丸太を宛がつて、籬挟みに犄々と括つて、左もなき所は三間梯子を緊しく打付けてしまつた。正面の



堡壘は、粗造ながら先づ出来た。此上は唯勝敗を何れにか決するのみである。

潮垂衣絞りもあへず、藤柵の大柱を本營の牙旗と縋つて、堡壘の上に立つて見ると、實に凄まじい寄手の勢だ。

灰色の空は低く海の面に舞い下つて、吹き上ぐる潮煙は、雲か、霧か、分からぬ蓬々としたものが、連りに北へ北へと走つて居る。

常に海路の末に見る富士を初め相豆の連山は何處へ行つたか、固より影も見へず。降りしきる雨、しぶく潮煙に、遙かの沖は茫とかき暮れて、空と海の堺も見へぬが、一里あまり彼方には猛りに猛つた泥海の時々空を目がけて跳り上がるのがはの白く見へる。鳴鶴が岬

の石垣に、破れよ碎けよとぶつかつては三丈ばかり高く水煙を飛ばすのが見へる。直ぐ其處の川口の形勢に到ては、殊に凄まじいのである。常には八朔の高潮にも高く水上に出づる砂洲は、草一本の末も見へぬ程深く水底に没して、川口の咽喉は平常に倍して潤くなつて居るが、三日來降り續いたため夥しく漲つて來た川水は出でむを欲して川口の進潮に支へられ、風を挟むで騒々上げて來る潮水は満々たる川水に支へられ、川口の石垣の間に壓搾せられて、互に衝き合ひ、押し合ひ、もつれ合ひ、渦まき、哮つて、十二分に怒を含むで居る。恰も此時に乗じて、颯々たる暴風一陣二陣空際から吹き落して來ると、海は巨靈の手に撮み上げられるかの如く逆立つ

て、殆んど横に半里もある程の眞暗い大濤が、白鬣を振く白泡を散らして、陸を指して眞一文字に寄せて来る。而して其波濤は、北に小坪の岬に碎け、南に鳴鶴が岬の石垣に碎け、正面新宿の濱に柔らかに受け留められて、更に志を得ないが中に、唯一箇所襲ひ入る可き弱點を出越川の川口に見出すのである。こゝに侵入の口を見出して、鞆鞆と寄せて来る。川口の水に驚いて總立になる。其を其ま先鋒に、狹隘なる川口の一門を争ふて、一時にゴトと逆押しに押し上げるのである。平壤を突出する滿洲白馬隊の勢も未だ及ばない。實にウオトルルの其日、鐵石と固まつた英兵の方陣を目がけて驀地の乗込んで来る佛蘭西の裝鎧騎兵隊の勢まさか斯くの如く

であつたらふ。であるから、其衝に當を兩岸は、石垣も築地垣も板垣も瓦落々々と片端から崩れて、其颯と引くに當ては、押崩した物を瞬く間に引擡つて行くのである。吾寓は、川口とはや、斜になつて、殊に左の一角を竹藪で受とめて居る上に、流石防浪の堡壘が粗造ながら功を奏して、幾分かうちつくる濤の力を殺いで居るが、併し吾室の沓脱石の下は始終一面の水となつて、母屋の土間はや、もすれば水脛を没せんとする勢である。戰場も恐らく斯様であらう。危険の中にも一種壯快な、勝負氣が盛に催して、家主の娘を始めとして、加勢半分見物半分に來て居る近所の女子共迄が、防浪の堡壘に突立つて、吹きつくる雨風潮煙を物

ともせず、沖の方を眺めて居る。川口の山の様な波が寄せて來ると、  
 「來たよ」、「今度のは大いよ」と口々に罵りながら獨立つて居る。  
 最早其處へ來たと云ふ時分に、一同身輕に飛のいて、連りに「追つ  
 て下さい、(波を追つて下さいと云ふのである。波が高いと、聲をあ  
 げて追ふのは、海村の風俗だ)追つて下さいと叫ぶ家主が、兩手を  
 廣げて「ヤ、ヤアツ」と來る波を追ふ。加勢に來た男女、雨戸の隙  
 から覗いて居る小供まで、手をあげて「ヤアツ」と追ふ。村のカニユ  
 ートに叱られて、意地悪い波は防材を飛び越へ潜りぬけて其處ら一  
 面泡だらけにして颯と引くと、皆高い處からひらく飛んで下り  
 て、引く波のあと追かけて、堡壘の上から波の行末を目送つて居る。

宛ながら海と鬼子ツコをする様な者だ。上流の方でも、左右の岸か  
 ら頻りに「ヤアツ」と鬨の聲を揚げて居る。波は此兩岸の石垣板垣人  
 垣の間を、追はれながらに獅子奮進の勢を以て、眞一文字にかけ  
 通つて、富士見橋を一搖揺つて、果ては二丁ばかり上流のさ某邸の  
 石垣を苦もなく飛び越へて、其餘波は遙か上流に漲つて行く。  
 一しきり雨が止み、風が小止たかと思ふと、今度は西南に廻つて恐  
 ろしく吹き出した。吹きちぎらる、青葉木の葉はうなりをうつて亂  
 れ飛ぶ。波は逆立つ。立つ波頭を其まゝ風は引摺つて、一面の白煙  
 を吹き散らす。海は空と、風は潮と、まるで一になつて、浩浩とし  
 て殆んど物の音も聞へぬ。つゞけざまに打寄する大波小波に、往還

の上は大人の股を没し、庭の上は殆んど脛を没するばかりになつて来た。役目とは云ひながら、此荒の最中を郵税物かついで驅けて来た脚夫も、溜まらず飛び込んで来る。富士見橋の爪の土臺脆くも崩れて、向洲との通路は全く絶へ果てた。戦は今絶頂に達したのである。

立木に身を寄せて、辛ふじて川口の方を見ると、箱根の連山がつい川口に來たかと思ふ程の、正眞山の如き大波が打重ね／＼寄せて來る。吾南隣は竹藪に遮られて更に見へぬが、向ふの洲頭に立つて居るお某氏の別荘は夙に正面の築土垣を壊されて、家は著しく前の方へ屈んで居る。横手の垣と松が二三本残つて居たが、例の山

の如き波が一つ、續いて二つ、ひらり／＼飛びかゝつて、松は頻りに頷くと見る間に、殊に大きな波が勢込んで松の梢を飛び越して、瀧落しに來ると、最早跡は何も無い。唯家が前に俯いて、更に大波の來て攫ふのを待つのみである。此についた養神亭の南の角の石垣も波の來る毎に、幼稚の玩をぶ積木などを崩す様にぼろ／＼壊れ落ちて、其上に立つた垣も唯一笹りで意氣地なくばた／＼倒れて了ふ、表座敷に波を見て居た客の荷物を提げて、どつかは裏へ逃げ込むのが見へる宛ながら、鷺津丸根の落城を見る心地だ。あまり人間の蠶食が劇しいから、海も今は猛然と怒つて、其千金の費百日の勞を唯一舉に破壊して居るのであらふ。何處の家からさら

つたものか、青々した松の木、戸板、樽、桶、板ぎれ、木ぎれ、あ  
らゆるものが浮きつ沈みつ濁浪の中にもがいて居ると、海は奪ひ取  
つた敵のものを其まゝに破城槌として、石垣板塀所嫌はず砕けよと  
打つける、長い手鍵を蜻蛉切と打ふつて、邪魔なす物を突放し引上  
げて居た村の平八も、波の勢のあまり烈しいので、終に逃げ込  
だ。海は恣まゝに其復讐を逞しうして居る。

忽焉正面から來た波が引かけるかと思ふと、後に聲あつて

「やあ、裏からも水が來たぞ」

物置小屋も本屋の間から泡だらけの水が滔々と押流して來た。隣家  
の椽の下を打ぬいて、餘れる勢竹箴を一匝して、逆まに流れて來

たのである。所謂腹背に敵だ。時計を見ると未だ三時半、満潮と云

ふ六時半までには、猶三時間もある。

此時こそは、自分も烏潛がましいが、馬を樹下に立て潮の如く寄する  
佛軍の精銳を遙かに望みつゝ、時計を出し見て「ブルーヘルか、夜  
か」と獨語した英將の心になつたのである。

(三)

卒然雨が止む、風が少し小止れる、と思ふと伊豆の方の空がぼうつ  
と明るくなつて、黄色い空に山の影がほのかにあらはれた。

「おゝ、向ふ山が見へて來たぞ」

老幼男女一齊に関の聲を揚げた。斯一聲を聞いた時の心こそ、實に

エリントンが佛軍の横合からうつてかゝつた李軍の第一發の砲聲を聞いた時の心であつた。

戦ひは最早絶頂を越した。曩きの一吹、一浸が、敵の精根の限りであつたのだ。敵の旗色は確かに動いて居る。風は猶吹く。併し折々息が途絶へる。波は猶高い、前よりも猶高くないかと思はれる。併し其内に何處もなく強弩の末の氣味がある。此隙に、裏の竹籬の破れを潜つて、老龍庵に走せつけて見ると、豫想に違はず、松の小枝が折れて、草花の俯伏になつた位で、往還は大分崩れて居るが、屋敷其ものは一石も崩れず、屹として立つて居る。四時過ぐると、風力愈々衰へて來た。雲は北へ北へと幕引く様に

捲き去つて、南の方は青空も見へ、頭に綿帽子を被いでは居るが、富士の姿も、相豆の連山も瞭然と見へて來た。後の山に突然に法師蟬が鳴き出した。家主は「最早此方のものだ」と云ひ貌に、まだ勢猛に寄せて來る大波小波に足を洗はせながら、丸太に腰かけて、煙草を吸つて居ると、此方には加勢の男が握飯を食ひながら宿の娘と立話をして居る。

激戦已むと忽ち夥しく空腹を覺へたので、取りあへず、ずぶ濡れの着物を更へ、湯漬をかき込んで、南隣―北隣は場所と手當と共によかつたので、皆な無事だ―を見舞ふと、實に眼も當てられぬ。て某の別荘は、石垣も板垣も奇麗にとれて、松の木が根こぎになつ

て、椽の下に頭をつき込むで居ると、此方の車屋の便所はビザの塔よりも傾いて、井戸が潰れて、波はどん／＼床の下を打抜いて勝手次第に往來して居る。某の南隣のま某の家は、南の方の屋根を悉皆風にとられ、臺所を奇麗に波にとられて、半死半生の體で立つて居ると、其前には往還の電信柱が、倒れて、電線がぶら／＼下つたまゝ、頻りに波に引摺られて居る。風は止むだ。併し海は猶怒つて、今は殆んど満潮の勢未だ當る可からざるものがあつて、鞆と來る毎に此處等の家の周圍は一面の海になる。別荘から浪に追ひ出されて、紫の袴を着たる某の少い嬢様が下男の背につかまりながら、遠方から此慘憺たる光景を見て居る。

立つて見て居る中に、日が暮れた、と思ふ間もなく、また晝に逆戻りした様に、赫と明るくなつた。夥しい夕焼だ。所謂「戰餘落日黄」とは此事であらふ、満天滿地眞黄色に焼けて來た。獨り海のみ紫瀾洶湧、鞆鞆として荒れ騒いで居る。夕焼の空に際立つ水餘の破屋の眞黒いのを前にし、今引いて行つた波の殘溜の黄なるを踏んで、此景に對した余は、一種鬼氣の森然として身にしむを覺へたのであつた。

夜に入ると、風いよく止んで、「木枯らしの果はありけり海の音」、餘怒を帯ぶる海の音獨り鞆鞆として星光に鳴りどよむで居る。戰は最早終つた。海は終に販れて退いたのである。併し家々未だ戸前の

保障を徹せず、尙警戒を解かず、富士見橋の袂には、篝火か夜一夜燃へて居た。

## (四)

翌八日の朝、早く起きて見ると、人を馬鹿にした様な上天気だ。昨日の戦場を見舞ふと、實にひどい。自分も随分激戦をした積であつたが、餘所に比べるとまだ樂であつたと見へる。

吾僑居の前から一丁あまりの間は、道路は消滅して、昔の濱になつて居る。彼處の別荘は礎石を浪にとられて床下の砂を抉られて、べたりと前へのめつて居、此方の貸家は半分空に乗り出して、今にも顛覆しそうだ。大木の根が章魚の足の如くに長々と洗ひ出されて居

ると、道の切石は遠く畑の中にころんで居る、鳴鶴が岬の下の新築地の石垣は五六十間が程めちやくくに崩れ石原になつてしまつた。

川口は無暗に淺くなつて、洲が一夜に場所を變へて居る。

更に葉山の方に行つて見ると、道の真中には引揚げられた舟がづらり行手を塞いで、此方では大勢かゝつて、傾いた家をこね起して居ると、彼方では物置が倒れて半腐した萱の狼藉としたのを掻き退け、また彼方では家を素裸にして頭から行水を遣はして居る。別荘の崖崩れて、家の半ば空に浮ひで居るのも見へる。蒲鉾屋の俎板大の切石の砂に埋れて居るのを堀り出して數べて居る石工もある。生簀の籠を流して、二十兩損したと血眼になつて舟を出す爺もある。何處



の家では、四斗俵がころ／＼波に轉ばされて、誰の家は海から一丁もあつたのにぐるりと波に打まわされて、誰は道具を悉皆濕らして、誰は何したと云ふ。何處を向いても、其話ばかりで、人の顔を見ては、

「大きい暴風雨でムいましたよ、マア」

と云はぬ者はない。

家主の話では、十四年ぶりの荒だそうだ。

秋 漸 く 深 し

野路行けば、粟の收納の盛りにて、稻の收納もほつ／＼始まりぬ。

蕎麥雪の如く、甘藷の畑は彌繁りに繁れり。百舌鳴く村に、紅なる

黄なる星の如く柿の實の照れるを見よ。

彼岸花、螢草、野菊、蓼、小さき粟の如き稻の如き黍の如き烏麥の

如き八千草に鳴く虫の音を踏み分け行けば、蛙飛び、蝻斯飛び、稀

には蟹がさ／＼と隠れ行く。

又

山路行けば、薄苺萱の吾衣にかゝれるも、あはれなり。

山も秋や、深ふなりぬ。何の樹殊に色づき、何の葉殊に落ち初めし  
 と云ふにあらねど、林漸く疎に、山骨や、寒く、葉聲次第に乾き、  
 樹々日々透明ならむとするを覺ふ。默然として歩めば、小鳥の石を  
 落せしか、栗の實の自からはちけて落ちしか、ころ／＼がさと一聲  
 木の間に物の落つる音して、あとはこつさり静かになりぬ。

(十月十一日)

富士雪を帯ぶ

富士雪を帯ぶ。さやかに雪を帯ぶ。

秋空何ぞ高き。風威を帯ぶ相摸灘の怒號何ぞ壯なる。此空と此海の  
 間に玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。

絶頂より五合目のあたりまで、銀よりも白き雪は桔梗色の山膚を被  
 ひて、上は隈なく下は宛ながら笹縁とれる様に山を包む。雪色淨ふ  
 して點塵なく、日光に輝やき、水よりも澄める晩秋の空に襯し、豆  
 相の蓮山を踏み、萬波雪の如く立ち騒ぐ相摸灘を俯瞰して、秀麗皎  
 潔、神威十倍するを覺ふ。

嶽頂一點の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、更に四圍の大景に眼睛を點す。東海の景は富士によりて生き、富士は雪によりて生く。  
 (十月十六日)

### 風

今日の風こそ、風の初なれ。

空を見るに一點の雲なく、天心より地平線に到るまで青々として水の如く、日色晶々として到らぬ隈なし。而して風は何處よりともなく、彌吹きに吹き來りて、海を荒らし、山を騒がし、木の葉を掃ひて已ます。空色、木葉の響、すべて一種乾ける枯れたる氣味ありて、秋の深さを思はしむ。

又

日は風に吹き落されぬ。眼を上ぐれば、十二日の月何時か後山の上

に出でたり。洞然として未だ光なし。風の烈しさに月の光も吹き消  
さにひする心地せらる。

七時頃外に出で見れば、月は晝の如く風の上に冴へたり。地は白々  
と霜を敷きぬ。樹影深黒に亂る、道を踏みて、川口の方に行くに、  
前洲のあたり雪蛇の斜めに走るを見る。月影に白浪の寄するなり。  
十時頃に到るも風は猶止まず。海の音、戸障子のはためき、樹梢の  
うなり、其間には蛙の聲も混りて、屋を繞る。戸を開けば満天滿地  
の月色。

(十月十七日)

## 風の後

風の忘れたる様に止みぬ。先の程まで騒々しく頭を掉りたりし庭  
前の櫻樹も書ける如く静まりて、枝より枝にひき渡したる蜘蛛の糸  
の一微顫だに見る能はず。風の吹き集めたる落葉は其處に一堆、此  
處に一積、静かに伏して、がさども云はず。

庭に立ちて、空を望むに、地平線より天心に到るまで一點の雲なく、  
晶瑩玲瓏、明鏡よりも澄み、碧玉よりも匂やかに、深淵よりも光を  
含み、名工の鍛へる秋水よりも冴へたり。高く深く澄明にして、直  
ちに上帝の聖座をも見る可き心地す。

今日こそ眞に秋晩の尤も全き日の一なれ。二日に亘りし大雨の後、  
 二日に亘りし風あり。彼雨もて洗ひ、此風もて掃ひ、而して天地  
 は乾々淨々、空はいよ／＼高く、空氣はいよ／＼澄み、日はいよ／＼  
 明らかに、瑩々として宇宙は一の壁となりぬ。自然は此上に完き秋  
 目を興ふる能はじ。 (十月十八日)

月を帶ぶ白菊

墨の如き樹影を浴びて、獨り中庭の夜に立てば、月を帶ぶる白菊は  
 のかに香りて、花の月と囁やく聲も聞く可き心地す。俯きて、其一  
 枝を折らんとするに、しとど露にぬれたり。折れば、月影ほろ／＼  
 とこぼれぬ。

朝來の雨止み、風息み、月夜の静味言盡し難し。何に動かされてか、  
 井戸側の無花果の葉のがさりと云ひしあどは、一庭寂然として月と  
 影と共に眠りぬ。  
 唯、稀に、稀に、檐滴の蔭闇さ方に私語するのみ。 (十一月十二日)

暮 秋

柿かきの落葉おちばを踏ふみて、後山かうざんに登のぼる。

黄茅くわうぼう蕭々しやうしやうしやうとして亂みだれ、龍膽りんとうの碧へき、棘實いげのみの紅くわいと徑みちを綴つづる。

山上さんじやうより見みれば、田たは盡ことごとく刈かられ、麥むぎの綠みどり猶なほほのかにして、村むらも

瘠やせ、晚秋ばんしゅうの野のいたく寂さびぬ。

鳥からす五六羽ばあり、山上さんじやうの樹じゆより立たち、鳴なき連つれて彼方あなの村むらに向むかふ。啞あ

啞あの聲こゑ滿山まんざんに響ひびく。 (十一月十五日)

透 明 凜 然

碧空へきくう點翳てんえいなく、透明とうめいにして且凜然かつりんぜんたり。天てんに向むかつて石いしを投とうぜば、憂あつ

然ぜんとして天鳴てんならむかと思おもふ。

風止かぜやみて、搖動やうどうせる空氣くうきは瑩然けいぜんと凝こりぬ。此頃このころの空氣くうきは金質きんしつあり。

物響ものおとを傳つたふるにも春はるの如ごとく音波おんはの悠々ゆうくと廣ひろまり行ゆくにあらず、宛さな

がら三尖さんせんの飛矢ひし空氣くうきを射あぬけば、空氣くうきは憂然あつぜんと其響そのおとを傳つたへ、一瞬いつしゆんに

して止やむもの、如ごとし。 (十一月廿日)

## 秋 晩 の 佳 日

今日は美日なり。

朝早く起きて、井戸端に顔を洗ふ。空はほのかに紫立ちたれど、山際は猶ほの闇し。鶏は小屋の闇さに鳴き、雀は已に梢樹に囀る。曉の風冷やかに面を拂ふ。

川邊に出づれば、潮いたく乾て且淺く、其上に浮べる船も猶夢見顔なり。何處の家も猶戸を閉しぬ。砂の溜にちらく流る、殘月の影を踏みて、川口近く立ちつ、富士の朝日を見る。

富士は猶薄き藍色して立てり。相模灘も一點の光なし。西空一抹微

紅の光の外には、見る所凄として寒色を帯びざるはなし。鳴鶴の岬より馬士が菊車に腰かけて馬蹄の憂々に節あはしつ、俚歌を歌ひ來る聲、氷を砕くが如く朝の空氣を震はしつ。

良ありて西空の紅霞は下り下りて、已に富士の背後八九合の處に到れど、未だ峯頭一點の紅なし。怪しみて見つ、ある程に、峰頭白雪の一所指もてなすりたる様に薄き濁れる朱色を帯び來りぬ。眼も離さず、見れば一秒一秒雪上の斑點は次第に廣く、次第に澄み、次第に明らかに、果てはばつちりと薄紅に光り出でつ。雪は朝日の投げたる紅を吸ふて見るく、四面に浸み渡り、富士は終に紅に曙けぬ。鳴鶴の岬より鳶一羽すうと富士の半腹を掠めて、やがて

ばた／＼と羽搏つては駛せ、また駛せては二つ三つ羽搏つてすうと駛せ行く。

猶立ちてあれば、紅は已に相豆の連山に及び、顧みれば北の方も小坪の山に沿ふて空は全く薄紅になり、川水も臘脂を融き流したる様になりぬ。灘上に點々たる帆影も、近きは猶灰色に寒けれど、遠きは渾て金色をなしたり。

又

夕方また今朝富士を見し川邊の砂に立つて、夕日を見る。日はまさくに鳴鶴の右に落ちむとして、白光爛々として眼見ると堪へず。鳴鶴は夕日に負いて闇く、石垣も黒し。其石垣の根に、一艘の船あり。

橋の中程に捲たる帆を懸けたるが黒々と日に劃せられ、橋頭より三二條斜めに垂れたる帆綱は、日を受くる側に於て金色をなせり。水乾て砂汀廣し。農夫あり、きら／＼と落日の影流る、水に立ちて、肥桶を洗ふ。前の砂洲に貝を拾ふ小供の影もまた黒く水に映りぬ。眼を放てば、富士も、相豆の山もすべて茫としたる紫色になりぬ。やがて日は双肩を揺りて次第に落ち、初めは白金色の光を輪の四周にぼかせしも、落つるに従つて、次第に光を收めて金色の空に眼以て見る可き團々たる黄球となり、一秒々々沈み行く。日の沈むに従つて山の紫も漸ら濃くなりぬ。

やがて日は伊豆の山にかゝり、次第に沈みて次第に缺け、果ては金



の櫛くしとなり、點てんとなりて、終つひに入りぬ。今迄いままで赫々かくかくとして夕陽せきやうに榮はへたりし家々いへいへの西南面せいなんめんは、忽たちまち冷ひややかに蒼あそざめて、乾坤けんこんの間いのち生命いのちなるもの、今いましも過すぎ終おはりたる心地こころす。光ひかりは實じつに生命いのちなる哉かな。されど猶なほ日の入りしあとに餘光よくわうあり、相豆そうづの山々やま々濃ひらき紫むらさとなり、また藍あゐとなりぬ。日ひの入りたるあとの空そらは金きんより朱しゆとなり、更さらに焦こがれ燻くすりたる黄色くわうしよくとなり、餘あまの空そらも淺黄あさぎより縹はなとなり、紫むらさとなり、宵よの明星めいせい一つ夕日せきじつの跡あとに生うれ出でぬ。殘曛ざんくん天てんにあり、天水てんみづにあり。此美このうつくしき夕ゆづべに立たちて、見みれど飽あかぬ自然ぜんの日々あたら新あらたなるを感あず。(十一月廿四日)

### 時雨の日

今日は時雨の日なり。

はら／＼降り出いづるかと思おもへば、止とみ、止とみしと思おもへば、また思おもひ出いでたる様に降り出いづ。宿やどの女等おんならいく幾いくたびか乾物ほしものの出たし入れいに迷まよふ。自然ぜんも冬ふゆに入いらむとして、心こころ騒さわしきにやあらむ。「忙いそしう世よの思おもはるゝ時雨ときあめ哉かな」と、古こ人じんの句妙くめうなる哉かな。日は薄絹うすきぬにつゝまれたる様に光薄ひかりうすく、山茫ほうと打うちけぶり、落葉おちば勝かちなる木々きぎは打うちしめり、空氣くわいきはうつとりとして重おもし。恰あたも春陰しゆんに似にたり。たゞ寂さびしきのみ。(十一月廿七日)

## 寒 星

寒星一天、深黒なる屋根の上、深黒なる山の上、到る所として星ならざるはなし。葉落ちたる櫛の梢、大なる箒の如く空を摩して、枝星を帯びたり。静かに中庭に立てば、山頂のあたり波濤の如く夜あらしの過ぐるを聞く。殷々として遠雷の如きは、隣家夜粃を磨るなり。(十二月五日)

## 寒 月

夜九時、戸を開けば、寒月晝の如し。風は葉もなき萬樹をふるひて、飄々、颯々、霜を含める空明に揺動し、地上の影木と共に揺動す。其處此處に落ち散る木の葉、月光に閃めいて、簾々々々、玉屑を踏む思あり。

仰ぎ見れば、高空雲なく、寒光千萬里。天風吹いて、海鳴り、山騒ぎ、乾坤皆悲壯の鳴をなす。耳を側立つれば、寒蛩籬下に鳴きて、聲、絶たむとす。風に向ひて、月色霜の如き往還を行く人の履齒戛然として金石の響をなすを聞かずや。月下に狂ふ湘海の彼方に夜目

にも富士の白くさやかに立てるを見ずや。

月は照りに照り、風は彌吹きに吹く。大地吼へ、大海哮けり、浩浩又浩浩たり。

大なる哉自然の節奏。此月と此風と、殆んど予をして眠る能はざらしむ。(十二月十日)

## 風の湘海

静かなりし世の中、俄かに騒ぎ出でたる心地して、急に立出で見れば、已に風吹き始めてあり。

今までも紫だちたる紺青の色に湛へ居たりし相海は、陣々の風に吹き立てられて、尺に一瀾、寸に一波、白く起ち、白く倒れて、相摸灘は須臾に白泡白波狂ひに狂い、哮けりに哮けり、滔々汨々としてまさし沿岸一帯の磯山を押し流しもて去らむとするの勢あり。颯々たる風の波を吹きしぶくを見よ。濱の眞砂の舞ひ立つて煙の如く渦まくを見よ。落葉と共に、小鳥の飛鳴して吹き飛ばさるゝを見よ。

顔を掩へて濱を走り來る漁夫の弓の如く身を張りて走れども一所に止まを見よ。小坪の山の黄茅波の如くに揺らぎ、峯の松一齊に折れむばかり撓むを見よ。

碧空朗らかにして日色晶々たり。富士も相豆の連山も鮮やかに灘の彼邊に立てり。何處より如何にして風は吹くぞと怪まるれど、眼を注ぐ所、海も山も人も草木も自ら持する能はずして、狂奔し悲鳴し動擾す。

吹きつゞけて夕に近づけば、落日杲々として伊豆相摸の山々、富士の高嶺は渾て紫に變じ、三浦半島一帯は赫として火の如く夕陽に燃ふるが間を、相摸灘は金濤紫瀾朱波咆哮して、浩浩蕩々の音天地

に満つ。(十二月十三日)